



プロローグ

「お兄ちゃんっ！」

わたしは、冷やしておいたはずのプディングがなくなっているのに気づいた次の瞬間には、そう叫び走り出していた。

そして、わたしのプディングを横取りした犯人の部屋の扉を、勢いよく蹴り開けた。

「お兄ちゃんっ！ かってにわたしのプディングを食べたでしょ！」

部屋の中は、書物に溢れかえっており、まさに足の踏み場もなかった。

そして、書物の山の向こうにある机には、憎っくき犯人の姿がある。

わたしの兄である。

「た、食べてへんよ」と言って振り返ったお兄ちゃんの手には、しっかりとわたしの愛しのプディングがあった。

もう半分も残っていないよ……。

「今、手に持って食べているじゃないのよ！」

「そう、食べている途中であって、食べたわけではない」

お兄ちゃんは、学者口調でそう言った。

「なに屁理屈言っているのっ！」

わたしは、そんなお兄ちゃんの姿を見て情けなくなった。

「やっぱりあかんか……」

「ダメに決まってるよ！ どうしていつもわたしのプディングを、かってに食べちゃうの？」

「おいしいから」

お兄ちゃんは、即答した。

ぶちっ！

「おいしいからって、勝手に人の物を食べていいわけじゃない！ お兄ちゃんのバカっ！」

わたしの怒りのボルテージは止まることなく上がり続けて行く。

「ごめん、イリシスが作るプディングがあまりにも美味しいから、悪いと思いつつ手が出てしまうんや」

お兄ちゃんは、申し訳なさそうな顔の前で手を合わせた。

本当にもう……仕方がないんだから……わたしは、このお兄ちゃんの顔に弱い。

べつに、わたしだって本気で怒っているわけではないよ。

でも、もう二十代も後半になろうとしているのに書物馬鹿で生活能力ゼロのこの兄に対しては、ちゃんとした態度をとっておかないと、わたし達の生活が成り立たなくなってしまうのである。

本当にもう……しかたがないんだから……。

「わかったよ、許してあげるよ。でも、今度から食べるときにはちゃんと言ってね。わたしも多めに作るから」

「了解！」お兄ちゃんは、嬉しそうにそう言って、残りのプディングを口に運んだ。

わたし、イリシス・リヒトフォーエンは、この書物馬鹿で頼りない兄と二人で、村はずれの小さな家で暮らしている。

実は、わたしとお兄ちゃんとは血が繋がっていない。

わたしが、『お兄ちゃん』と呼んでいるのも単に習慣によるものだ。

まあ、簡単に言ってしまうえば、わたしとお兄ちゃんは単なる『同居人』ということになる。

しかし、小さい頃から一緒に住んでいると、自然と『お兄ちゃん』と呼ぶようになっていた。

わたしが、この村-ストアに来たのは、五年ぐらい前のことらしい……。

”らしい”と曖昧なのは、わたしにはその頃の記憶がないからだ。

今から五年前といえ、わたしが八歳ぐらいの頃だ。

だから、”もの心つく前・というわけではないんだけど、わたしにはその頃の記憶がなかったりする。

それどころか、わたしには、八歳より前の記憶が全くなかった。

あやふやながらもわたしの記憶が始まるのは、お兄ちゃんとの家で暮らしているところからなのだ。

もちろん、お兄ちゃんには、何度かわたしの過去について尋ねてはいる。

しかし、その度にお兄ちゃんは、「実は、ぼくもあまりよう知らへんねんな。昔お世話になった人から、イリシスを預かってくれと頼まれただけやから」と言うだけだった。

それぐらいで、年端もいかない子供を預かったりする……？

むうー、お兄ちゃんならしそうだよ……。

でも、今では以前に比べて、あまり自分の過去については気にならなくなっていた。

だって、今の暮らしが楽しいんだもん。

頼りなくて書物馬鹿のお兄ちゃんだけど、実は結構優しいし、本当に……本当にときどきだけどころよくみえるときもあったりする。

ほ、本当にときどきだよっ……。

それに、何よりお兄ちゃんと一緒にいると心が安まるのだ。

これが、かっこいいおにいちゃんだと、そうはいかないよね。

一緒にいるだけでドキドキしちゃうもん♪

それに、フィナさん達村の人も親切だし。

フィナさんは、わたしがバイトしている『ダンネベルク』という、昼は普通の料理店、夜は酒場というお店の経営者兼店長さんである。

といっても、あまりお店は大きくはなく、フィナさんとわたしの二人だけで切り盛りしている。

フィナさんは、すごい美人でかっこいいというお姉さんタイプの女性だ。

年は、よくわからないけど、お兄ちゃんと同じぐらいに見えるから二十代半ばといったところかなあ……。

とにかく、ハッとするぐらいの凄い美人なのだ。

だから、フィナさんは、男のお客さん達にとっても人気がある。

お兄ちゃんも、お酒はあんまり飲めなくせに、フィナさんに会うために毎晩『ダンベベルク』へ通っている。

本人は、わたしが酔っ払いにからまれないか、心配だから毎日来ていると言っているけど……わたしが見る限りは、とてもそうは見えない。

むしろ、『ダンネベルグ』にいるときのお兄ちゃんの目には、フィナさんしか映っていないように思える。

まあ、フィナさんには、まったく相手にされていないみたいだけど……ほんと、お兄ちゃんには、もうちょっとしっかりとしてほしいよね、ふうー。

でも……わたしもフィナさんみたいになれたら……そうしたら、お兄ちゃんだって……って、な、なに言っているのよっ！

お兄ちゃんのバカっ！

ま、こういう感じで、わたしは、毎日楽しく過ごしているというわけなのだ。

だから、わたしの過去になにかがあるのかはわからないけど、それを知ることによって今の生活が壊れることになるくらいなら、知らない方がいい……今は、そう思うようになっていた。

そして、それと同時に、この楽しい生活がいつか終わるのではないかと、ときどきすごく不安になるときがある。

しかし、そんなときでも、結局、今日のようなお兄ちゃんとのやりとりの中で、その不安は薄らいでいった。

でも、わたしもいつかは結婚して、この家を出ていかなくちゃならないのかなあ……わたしが、お嫁にいったら、お兄ちゃん泣いちゃうかも……。

それどころか、日々の生活もまともにできなくなりそうだよ……。

むうー、これじゃいつまでたっても結婚なんてできないじゃないのよ……。

もうちょっと、お兄ちゃんには、しっかりしてもらわないとね。

……でも、いざとなったらわたしが、お兄ちゃんと結婚してあげてもいいかなあ……て！

も、もちろん、いざとなったらの話よっ！

わたしの理想は高いんだから！

あんな書物馬鹿で頼りない男なんかは、わたしの理想とは全然違うんだからね。

わたしの理想の男性は、知的でクールな雰囲気を持っているんだけど、実はとても優し

くてわたしをいつも守ってくれるという感じの人なの。

.....まあ.....現実には、そんな恋愛小説の主人公みたいな人がいないのは、よくわかっているんだけどね。

でも、まだまだ恋に恋するお年頃ですから、そこらへんは許していただくということで.....。

「イリシス、さっきからなに独りでぶつぶつ言ってるんや？」

えっ.....な、何？

いきなり声をかけられたわたしは、回想&妄想の世界から帰還した。すると、わたしの目の前には、お兄ちゃんの心配そうな顔があった。

.....わたし、また妄想モードに入っちゃったの.....恥ずかしいよ.....。

「な、なんでもないわよ。それよりもお兄ちゃん、わたし、これから『ダンネベルグ』へ行くけど、お兄ちゃんはどこかに行く用事あるの？」

「ないで。今日は、午後にお客さんが来るからずっと家におる」

「なにそれ？ わたし、お客さんが来るなんて、全然聞いてなかったよ」

「だって、言わへんかったから」

「もお！ なんて言ってくれないのよ。お茶菓子とかなにも買ってないよ」

「そんなんいらんて。すぐに帰ってもらうつもりやから」

「そうなの……まあ、それならいいよ。じゃあ、お留守番よろしくね、お兄ちゃん」

わたしは、お兄ちゃんにそう言うと、勢いよく玄関の扉を開けた。

▽

「了解！」

私は、彼女を見送ると自室へ戻り、本が山積みになっている机の前に座った。

そして、しばらく、何もせずただ天井を見つめる。

今日が約束の日か……。

これからやって来る長老達からの使者に、私のイリシスに対する判断を伝えたら、彼女は自由になる。

……いや、今後も彼女は、法王庁の監視下に置かれることには変わりはないから、自由になるとは言いすぎか……しかし、もう、彼女が異端者として断罪されることはないはずだ。

そして、イリシスの前から、“書物馬鹿で頼りないお兄ちゃん”は消える……。

私は、彼女が僕を評するとき好んで使う、この“書物馬鹿で頼りないお兄ちゃん”というフレーズを気に入っていた。

彼女の口からこの言葉を聞く度に、私は、とても穏やかな気分になれるのだ。

ただ、それと同時に彼女に対する罪悪感も心に広がっていった。

彼女が、私に心を開いてくれているのはわかっている。

彼女は、私のことを本当の家族のように思ってくれているようだ。

しかし、彼女が見ている私は、あくまでも”書物馬鹿の頼りないお兄ちゃん”であって、本当の私ではない……。

本当の私は、自ら信じる秩序の正統性を証明するために、彼女を利用している酷い男だ……。

彼女の思っているような”お兄ちゃん”ではない……。

正しく、理想とすべき秩序。

正統と異端。

全ては、単なる解釈の違いにすぎなかった……誰も間違っていない。

ただ、それを間違っていると言わなければ、自ら信じる秩序を保つことができない……自ら信じる秩序を正統であると証明しなければ、この世界から排斥され『異端』へと陥ちてしまう。

だから、私は……

イリシスを利用した……。

騙して、利用した。

汚して、利用した。

貶めて、利用した。

しかし、こんな私に対しても、彼女は、とても心地よい笑顔を見せてくれた。

私は、その笑顔を見るたびに、全てを忘れてこのままここで過ごすことを夢想する。

しかし、それはあくまで夢に過ぎない。それは、決して実現することはない。

このなんでもないことが当たり前の穏やかな日常は、私が作り出した幻だ。

私の欺瞞の上に成立する幻なのだ。

しかし、その欺瞞を一時でも忘れることができれば、このストアでの生活が私にとっては何ものにも代えがたい大切な時間となった。

おそらく、今後の私の人生において、これ以上の満ち足りた時間を過ごせることはもうないだろう。

それが、私にとっての必然。

しかし.....イリシスは違う.....。

彼女には、これからも、この穏やかな日常を享受させてあげたい。

彼女には、笑顔に溢れた人生を送らせてあげたい。

彼女は、何の罪もないのに、充分過ぎる程の苦しみを受けた。

.....もうこれ以上.....彼女から何を奪えるというんだ？

もう、彼女を苦しめたくはない。

もう、彼女は、充分過ぎるほど苦しんだ。

だから.....

イリシスは、私と一緒にいるべきではない……。

私と一緒にいれば、私自身が彼女を苦しめ続けることになってしまうことになるだろう……。

私は、この世界の流れを、曖昧な輪の連鎖を止めなければならない。

そして、そのためには……。

ポーン

時計が正午を告げた。

……もう……長老達の使者が来る頃だった。

▽

「ただいまぁ」

わたしは、夕ご飯の材料が入った買い物袋を、玄関に置いた。

あれ？

いつもだったら、「おなかがすいた～、早くメシを作ってくれや～」というお兄ちゃんの声が聞こえてくるのに……今日は、どうしたんだろう？

「……お兄ちゃん？」

しかし、わたしの呼びかけに返事はない。

どうしたのかなぁ……今日はどこにも行かないって言っていたのに……。

お兄ちゃん、散歩にでも行っているのかなぁ……でも、なんだかそんな感じじゃないし……。

これじゃあ、まるで……まさかっ！

わたしは、買い物袋を投げ捨てると、お兄ちゃんの部屋に向かった。そして、お兄ちゃんの部屋の扉を勢いよく開けた。

部屋には、何もなかった。

どういうこと……？

今日、わたしが家を出るまでは、あんなにたくさんの本があったのに、今は、この部屋には一冊の本もなかった。それどころか、机や椅子等の家具類もなくなっている。

まるで、そこには、初めから誰も住んでいなかったかのように、全てがなくなっていた……。

「……何かの冗談だよな……お兄ちゃん……」

誰もいないのはわかっているのに、わたしは声に出していた。

「どこかで見て、笑っているんでしょ？ ねえ、お兄ちゃん……？」

お兄ちゃんは、いなくなってしまった……。

「そんなに意地悪しないでよ。もう、わたしのプディング勝手に食べても怒らないから……」

お兄ちゃんは、もうここには戻ってこない……。

「ねえ、お兄ちゃんっ！」

涙が何度も頬をつたって床に落ちていく。いつかこんな日が来るんじゃないかという漠然とした不安はあった……。

でも、いつまでもこの生活をしていけるという希望も……希望も確かにあったのだ。

「お兄ちゃんの嘘つき……わたしのことを必要だって言ったのに！」

これが、わたしとお兄ちゃんとの別れ。

そして、私とお兄ちゃんが再会したのは三年後のことだった。

《幕間》

法王領『エフィア』

聖ペテル宮 『法王選出会議』

元老 ラウス・ハンザ

元老 イル・ネア

元老 キト・ルフィダイン

元老 オスロ・レファンダイン

「昨夜、クレメンズ卿が、ファレンス王国出身の枢機卿ら5名とともに、エフィアを出たらしいですな」

「私の方にもその報告は来ている。クレメンズ卿は、ファレンス王国へ向かったようだな」

「すると、今回のファレンス王による対立法王擁立を裏で糸を引いていたのは、クレメンズ殿でしたか。あの方は、どうしてもレクラム君を、法王の座に就けたかったみたいですね」

「法王選出会議の元老といえども、聖座が空いては、自らの野心を抑えることができなくなっただうところか……愚かだな」

「おそらくクレメンズ卿らがエフィアから逃亡したのは、ファレンス王国軍の侵攻に合わせてだろう。ファレンス王は、我々が彼の要求を断ったことを知ると、直にエフィアに向けて進軍を開始させたようだ」

「動きが早いですね。まあ、我々の答えなどは、初めから分かっていたでしょうから、予定通りといったところでしょうが」

「レクラム……いや、今やランスダイン法王聖下でしたかな」

「おやおや、レファンダイン卿は、相変わらず皮肉がお上手ですね。ただ、皮肉も良いですが、こちらは、まだ聖座が空いている状態であることをお忘れなく」

「そうじゃな……今のままでは、いささかこちらの分が悪い。対立法王であるレクラムの下には、反教会派の諸侯達が多く集まってきているそうじゃ。しかも、聖ルゴーニュの残党や、前法王近衛騎士団からもかなりの数が向こうの陣営にいるという報告もある」

「『世俗の腕』の軍隊だけなら何ら恐れる必要はないが、律法師や修道騎士達を、相手にするととなると厄介ですな」

「さらに、レクラムは、『扉』を手にしている。こちらで確認できている『扉』は、レクラムが有しているものだけだといって油断できない。レクラム程の実力はなくとも、ある程度の魔法の心得があるものが『扉』を使えば、修道騎士団一つに匹敵する力が出せるからな」

「レクラム・クレメンズですか……もっと早くに処理しておくべきでしたね……」

「それにしても、レクラムもよくこの八年の間、逃げ続けられることができたものですな」

「まあ、あいつも、かつては聖ルゴーニュ修道騎士団の総長まで努めた男だからな。それに、あいつの手には『扉』がある」

「『扉』ですか……確かに、それがあれば八年もの間、我々から逃げ続けることができたことも頷けますね」

「『扉』を使えば、如何なる魔法も、その積極要件の『立証』を必要としなくなるのだからな」

「そうですね。そのようなことをされては、『反証』はもとより、その魔法の消極要件を『立証』しようとしても、無意味になりますからね」

「今回の件も、レクラムが、『扉』の存在とその効果を、世俗に知らしめたことが一因となっていることに疑いはないですな」

「確かに。前の大規模な異端審問を逃れた世俗の腕の多く、特にファレンス王トアスが、『扉』にただならぬ興味を示していたということは有名でしたからね。しかし、レクラム君が、トアスに与するとは……」

「しかし、レクラムがファレンス王と手を結び、法王座を欲しがっていることは事実だ」

「では、どうします？」

「教会軍を編成しファレンス軍を迎え撃つしかあるまい。問題なのは、その総司令官を誰にするかじゃが……」

「わたしは、第一審問管区長が、その任に適していると思います」

「ルクト殿か……まあ、この『扉』を含めた『聖女』問題については、彼ほどの適任者はいないと思うが……」

「レファンダイン卿は、彼に何かご不満でも？」

「いや、そうではない……そうではないが……」

「おそらく、レファンダイン卿は、ルクトさんが、オステル殿のお弟子さんだったことが気になさっているのでしょうか？」

「……」

「まあ、確かにオステル殿については、我々も判断しかねることが多い。しかし、ここはルクトに任せると良いとわしは思う。今回の件は、『扉』を含めた『聖女』問題を一気に解決する好機ではないだろうか？」

「そうですね。この件を『聖女』問題と捉えれば、ルクトさんほどの適任者は他にはいませんしね。私も、彼が教会軍総司令官、『教会の旗手』として一番ふさわしいと思います」

「私は異議はないですぞ」

「レファンダイン卿はどうじゃな？」

「……私も異議はありません……」

「では、法王選出会議の名の下、第一審問管区長ルクト・ハンザ枢機卿に対し、教会軍総司令官に任命することを決定する」

聖ライン教会における最大の禁忌の一つ。その存在自体が公的には隠されている。しかし、この大陸の者なら誰でも『ペジエの聖女』の名で知っている。

『ペジエの聖女』

この名を大陸中に知らしたのは、一つの事件からだった。その事件は、今では『ペジエの惨劇』と呼ばれており、法王特使イリエル・ドラニアが、大陸東部の大国タウンゼルト王国の首都ペジエ近郊にて、暗殺されたことに端を発した。

結局、同事件の犯人は捕まらなかったのだが、法王庁は事件の背後に、タウンゼルト王レント三世がいると判断した。ドラニアが、レント三世を異端者庇護の廉で破門した直後のことだったからである。

ラスティア大陸に住むほとんどの者がライン教徒である現状において、教会から破門されることは死刑宣告に等しいものである（通常、破門された者の所有権は否定され、破門者の財産は教会に没収される）。しかも、破門の理由が、ライン教における最大の禁忌である『異端』に酌みしたことであるならその罪責は一層重い。

ライン教は、『魔法』を教会の独占としており、『魔法』の使用は、『教会律法師』と呼ばれる教会から秘蹟を受けた者だけに許された特権であった。律法師以外の者が『魔法』を使用することは、厳しく禁じられ、この禁を破った者は『異端者』と看做され異端審問にかけられた。

しかしそれにもかかわらず、レント三世は、その『異端者』を匿い、自軍の兵士に魔法を教えさせていたのである。

そもそも、魔法を使うことは、高い能力を要することであり、その能力がない者が魔法に触れると、精神的にも肉体的にも破綻を来す。したがって、魔法を使えるようになるためには、飛びぬけた才能がない者以外は、適切な指導者の下で長く修行することになるのが通常である。

しかし、『異端者』の多くは、その才能も努力も無しに魔法に触れるため、『魔』に取り込まれてしまう結果となる。

『魔』に取り込まれた人間は、まず精神が崩壊し、次いで肉体が崩壊する。そして、最後には、人としての形を崩し、ただ人の血と肉を求める『魔物』と呼ばれる異形の殺戮者と化す。これ程までの危険が

あるのに、異端者達は、安易に『魔法』を、『力』を求めてしまう。

かつて、その力と人格により尊敬を集めていた教会律法師の一人が、「力を持つ者は、その力に対して責任を負わなければならない。その責任を負う覚悟と能力がない者が力を持てば、己と周囲とを不幸に
してしまうだろう。力には、それだけの危険が伴うのである」という言葉を残している。

この言葉は、正式に魔法を学んでいる者なら誰もがそらんじることできる程有名であり、かつ核心をついたものだった。

もともと、たいていの異端者達は、教会にとってそれほど脅威とはならなかった。

それは、教会からみれば、所詮、彼らは『魔法』を使いこなすことができない取るに足りない者達であり、教会の『魔法』の独占体制を揺るがすことには直接的にはつながらなかったからである。

しかし、レント三世が匿っていたピエト・オステルという異端者は違った。

なぜなら、オステルは、大陸における法理論の総本山、法王庁立聖ライン大学の総長まで務めたことのある教会の重鎮であり、かつては彼自身、法王特使として教会の異端審問の重要な一端を担っていたからである。

彼の弟子達の多くは、教会の高位聖職者になっており、その中には有名な教会律法師もいる。

つまり、彼自身が『正統』派の一員であり、教会が主張する『秩序』の擁護者だったのである。

そのオステルが、当時その職にあった法王特使を辞し、姿を消したのは、彼が異端審問のためにある小さな村を訪れているときだった。

そして、その後すぐにオステルは、大陸全土にその影響力を及ぼす『異端の聖人』として知られるようになる。

彼の存在によって、教会が異端者に対する態度が強行になり、大陸の地図が書き換わった。

しかし、オステルをもってしても、『異端』は『正統』に成り代わることはなかった。

それは、『魔法の解放』を求めていたのが君主・諸侯のみであり、庶民は、『魔法』の必要性を感じていなかったからである。

そして、レント三世が、オステルを自国軍に魔法騎士団を設立するために迎え入れたときには、大陸全

土に及んだ熱病的な異端審問は、もうすでに収束に向かっていった。

破門宣告を受けたレント三世は、手段を選ばず、魔法騎士団の設立を急がせた。

しかし、いくら騎士として優秀であっても、魔法の修行をしたことがない者が魔法を、それも実戦に耐え得る魔法を容易く修得できるはずはない。

能力を超える『力』を持つようとするのは『破滅』へつながる。

当然のように、兵士達は、次々と『魔』に飲込まれて行った。

そして、いつしかタウンゼルト王国の王都ペジエは、『魔物』が跳梁する『魔都』と化すに至った。都市ごと『魔』に取り込まれたのである。

幸い、ペジエは城郭都市だったので、城壁に張ってあった結界により『魔』が外へ溢れ出すことはなかったが、レント三世討伐のために組織された教会軍が到着したときには、城壁の中で完全に人の形を保っている者は存在しなくなっていた。

その惨状を見た教会軍総司令官である枢機卿は、「全てを焼き払え！」と全軍に命令を発した。

教会軍によって火を放たれたペジエは、三日三晩燃え続けて廃虚となった。

当時、ペジエには、一万二千人程の人々が暮らしていたと言われており、その全員が『魔』に取り込まれたことになる。そのあまりにも悲惨な状況は、法王の命により他言することを厳しく禁じられた。

しかし、生存者はいた。

その生存者がどのような状況で保護されたかについては、一般には知られていない。しかし、その生存者がまだ年端もいかない少女であったことは、直接保護した兵士から広まった。

『魔』の中において、『魔』に取り込まれなかった少女。

その少女は、後に『聖女』と呼ばれるようになる。

森の中の街道を歩く美少女一人。

てへへ……自分で『美少女』なんて言うな！ って声が聞こえてきそう。

もちろんそんな声は無視するけどねっ♪

なんと！ わたし、イリシス・リヒトフォーエンは、今日、ルッツ司教さまから司祭の叙階を受け、ライン教会の一員としての第一歩を踏み出したのだ！

わたしの心は、これから始まる新しい人生に対する期待で膨らんでいた。

もう、パンパンである。

そう、パンパン！

パンパン！

パンパンだよおー！

……ふうー、やっぱり、気持ちがついて行かないや……自分はやっぱり騙せないよ……。

今、わたしは、ベルグの街に向かっている。あの厳しい魔法の修行から解放され、『豊穰の都』と呼ばれている大都会へ向かっているにも関わらず、わたしの心は沈んでいた。

その原因は、司祭の叙階とともに与えられた、教会聖職者としての『務め』である。

『第一審問管区長付異端審問官』

「……」

何よそれ？

よりもよって、なんで、異端審問官なのよ！

しかも、審問管区長といえば検邪聖庁さまのことじゃない！

その直属の異端審問官なんて……ああ、『夢であつたらうれしいな♪症候群』に陥ってしまいそう……。

こんなことならストアで大人しくしていれば良かったよ……。

ダメよ、イリシス。貴方にはやるべきことがあるはずでしょ。こんなところで挫けてしまっているの？

そうよね。がんばらなくっちゃ。

ありがとう！ わたし……。

この”自分で自分を励ます”のって結構効果あるんだよね（寂しい奴なんて思わないでよ）。

でも、本当に、異端審問官なんてわたしにつとまるのかなあ……。

だって、あの異端審問官なんだよお！

数ある教会の『務め』の中でもっとも恐れられているんだよお！

異端者を火あぶりにしたりするんだよお！

もちろん、本で読んだだけだけど……。

まあ、実際は、想像していたものとは全然違うのかも……。

うん！ その可能性もあるわよねっ！

……まあ……それはそれとしても……。

どうして検邪聖庁さま付きなのよっ！

検邪聖庁一十年前に、大陸を七つに分割して設立された審問区を統括する七人の枢機卿の通称。十年前から始まった大規模な異端審問は、教会最高位の律法師でもある彼らの力と権威を背景に行われていた一。

わたしは、修行中に読んだ何かの本に書いてあったことを思い出しながら、憂鬱さを増幅させていた。

検邪聖庁さまにお仕えするなんて、わたしにできるのかなぁ……？

だって！ あの検邪聖庁さまよっ！

法王聖下さえもその前には畏まるといわれている検邪聖庁さまよっ！

……ま、まあ、なんとなるわよね……うん、なる、なると信じよう……。

……でも不安だよお……。

ラスティア大陸の東部メッツ山脈の麓にある山村ーストアは、500人に満たない小さな村である。しかし、そんな過疎の村でありながら一つの司教区となっていた。

ライン教会特別司教区『ストア』

他の司教区が法王の統制下にあるのに対して、ストアは、法王から独立した機関である法王選出会議の直轄司教区ー特別司教区となっていた。

現在、特別司教区に指定されている教区はストアを含めて五区あり、それらの教区の司教には、聖ライン教会の中心的な要職の経験者が就いていた。

ストア司教ラル・ルッツも、二十年前までは法王庁の高官の一人だった。

しかし、当時教会が禁じていた研究ー「『魔』に取り込まれた者を救済する研究」を手がけたために、ラルは教会を追われた。

ただ、それまでのラルの実績により破門されるまでには至らなかった。

そして、その後十年余りの間消息を絶っていたが、八年前、ラルは、再び教会に戻ってきた。

教会に復帰したラルがまず初めに手がけたのは、『聖ルッツ救護騎士団』の設立だった。

同騎士団は、「『魔』に取り込まれた者を救済するための実行機関と研究機関の両方の性格を持つ組織である。

ラルは、前法王ラスティアス三世の理解を得て同騎士団を設立し、初代総長として自ら先頭に立ってかかる救済事業を展開させていった。

50歳近くになったラルが、教会に戻ってきた理由、それは、かつて見失いかけた『秩序』ともう一度向かい合うためだった。

そして、彼はこの地で、当初考えていたこととは違う形で、自らの『秩序』と向かい合うこととなった。そして、ラルは、一人の少女に自らの『秩序』を託した。

その少女の名は、『イリシス・リヒトフォーエン』。

かつて、彼の『秩序』を崩壊させた男の『成果』だった。

ベルグの街の城門をくぐったわたしは、その華やかさに圧倒されてしまった。

行き交う人の数、洗練された服装、そして、石造りの重厚な装飾がほどこされた建物が、古くから商都として栄えてきたベルグの街が、今もなお栄えていることを証明している。

ストアという田舎から出てきたばかりのわたしにとっては、目もくらむ華やかさだった。

うわあ、やっぱり都会はすごいよお……ストアとは全然違うよね……。でも、田舎者だって馬鹿にされないようにしなくちゃ。わたしだって化粧して綺麗な服を着てオシャレをしたら、都会の女の人なんかには負けないんだから……まあ、そんなことを気にしている場合じゃないけど……。

わたしがベルグに来たのは、現在、この街に滞在中の第一審問管区長ルクト・ハンザさまと合流するためである。

ルクト・ハンザさまか……どんな方なんだろう？

優しい方だったらいいのになあ……。

でも、審問管区長……しかも、法王庁があるエフィアを初めとする主要都市が多く存在する第一審問区を統括されている程の方である。“優しい”という言葉とは程遠い方と考えていた方がいいよね。

来る途中で、心の準備を整えてきたつもりなんだけど……まだ準備ができてないよお……ま、ここまで来たんだから、あとはガンバルしかないよね。

うん！ ガンバレわたし！

それに、ハンザさまはとても二枚目な方で、年もまだ二十代だという噂を聞いたことがあるんだよね♪

ああ.....本当に素敵な方だったらいいのになあ.....。

もしかしたら、わたしのこの美貌の虜になっちゃうかも.....って、それはないか.....。

わたし、顔つきも幼いし.....。

身体は、幼児体形だし.....。

でもでも！ もしかしたら、大人っぽい女性よりも可愛らしい女の子が好きかもしれないよね.....って、それじゃあロリコンじゃないっ！

ドン！

「痛いっ！」

わたしは、誰かにぶつかって尻餅をついてしまった。そのコケっぷりが田舎者丸出しである。

いててっ.....思っきりお尻を打っちゃったよ.....お尻がワレちゃうよ.....。

「大丈夫？」と、わたしが、お尻をさすっていると頭の上から女性の声が聞こえてきた。

わたしは、顔を上げてその声の主を確認する。

二十歳前後ぐらいのショートカットの美人だった。

強気で自分に対して絶対的な自信を持っている感じがする。

しかも、抜群のプロポーションをしており、胸など、わたしのとは同種のものとは思えないくらい大きい……何を食べたらあんな風になれるんだろ……

肉？

それに、わたしと同じ、黒い審問衣を着ているところをみるとこの人も異端審問官なのかなあ？

しかし、人々に『畏怖』を与える審問衣を着ているというのに、その上からでも彼女がとてもスタイルが良いことが充分わかった。

しかもその豊満な肉体が審問衣を着ることによって、かえって艶やかな感じがしているような気がする……なんかエロい。

へえーっ、こんな人も教会にはいるんだ……ビックリ。

はっきり言って、わたしは、この女の人に女性として魅力が負けている。

ま、まあ……わたしも彼女ぐらいの年になれば、あれぐらいには……ってこの体形から どうやったらなれるのよ！ と、自分の幼児体形にツッコミを入れてみたり。

まあ、いつまでも、こうやって通りの真ん中で座って（しかも、劣等感に苛まれている）いるわけにもいけないので、わたしは立ち上がることにした。

すると、そのナイスバディの女の人が手を差し出してくれたので、わたしは、その手を借りて立ち上がった。

「……すみません……わたし、考え事をしながら歩いていて……」と、ペコリと頭を下げた。

さすがに「妄想大展開中でした」とは言えない。

「気をつけなさいよ。最近、この街も結構物騒になっているらしいから、あなたみたいな可愛い娘は攫われちゃうかもよ」

可愛いだなんて……この人はいい人だよ……うん、うん。

彼女は、言葉を続ける。

「審問衣を着ているところを見ると、あなたも異端審問官みたいだけど……」

「はい。今日付けで、第一審問管区長付異端審問官に着任するイリシス・リヒトフォーエンといいます」

「えっ、そうなの？ 実は、あたしもルクト様付の異端審問官なのよ」

へえーっ、偶然というものはあるもんなんだあ……でも、この人って”ルクト様”って言ったよね？

検邪聖庁さまをそんな気安い呼び方をしても大丈夫なのかなあ……？

「あたしは、マリーナ・ランカスティ。マリーナと呼んでね」

彼女ーマリーナさんは、そう言うと微笑んだ。その微笑があまりにも魅力的だったので、一瞬、わたしは彼女に見惚れてしまった。

しかし、すぐに、わたしも負けてはならないと思い「わたしも、イリシスと呼んで下さい」とせいっぱいの笑顔を作って応えた。

マリーナさんは、そのわたしのぎこちない笑顔を見ると、プッ！ と吹き出した。

「わかったわ。でもイリシスちゃん、あたしはあまり窮屈なのは苦手だから、そんなに構えなくてもいいわよ」

「……はい、すみません」

わたしは、自分の顔が、熱くなっていくのを感じた。

でも、マリーナさんは、少しくせがありそうだけど、優しそうな人で良かった。

これから一緒にお『務め』をするんだから、イジワルな人だったりしたら、嫌だもんね。

マリーナさんもわたしと同じで、今度新しくハンザさまの直属の審問官になるらしく、この街にはさつき着いたと言った。

しかし、マリーナさんは、わたしと違って既にこの街の華やかな雰囲気馴染んでいた。出身地を聞くと、イシュタル（神聖ライン帝国の首都）だと言っていたので、やはり都会の大人の女性は違うと、改めて自分の田舎っぽさと、子供っぽさを認識させられた。

まあ……わたしみたいなオコチャマがマリーナさんみたいな大人の人と比べるのが間違っているんだけどね。

そうだよ。

うんうん。

とにかく、いつまでも道の真ん中で立ち話を続けていても仕方ないので、わたしは、目的地であるベルグ高等法院に向かうことをマリーナさんに提案した。

「マリーナさん、この場所ってさっき通りませんでしたか？」

「イリシスちゃんもそう思う？ 実は、あたしもそう思っていたところよ。しかも、既に三回ぐらい同じ看板を見ている気がするわ」

「つまり、わたし達は、道に迷ったということですね？」

マリーナさんは、コクンと頷く。

.....やってしまった.....田舎者の十八番”都会で道に迷う”。

マリーナさんがいるから大丈夫だと思っていたのに.....まさか、マリーナさんが方向音痴だったなんて.....。

美女なのに、方向音痴。

まあ、それぐらいなら致命的な欠点にはならなそうだけど。

しかし！

今のわたし達にとっては死活問題である。田舎者と都会出身だけど方向音痴の二人組じゃ、この広いベルグの街で目的地に着くなんて至難の業だよお.....。

どうしよう？

街の人達も、わたし達が着ているこの異端審問官の象徴である黒い審問衣を見ると避けてしまうし...
...やっぱり、異端審問官って嫌われているのかなあ.....。

「こうなったら、そこらへんの人を捕まえて、審問権の名の下に、無理やりにでも高等法院への道を聞きだすしかないわね」

マリーナさんは、サラリとかなり怖いことを言った。

しかも、冗談ではなく、本気の目をしてる。

マリーナさんって……結構怖い人かも……。

わたしが、マリーナさんが近くのパン屋に入ろうとするのを止めようとしたとき、「もしかして道に迷ってんの？」と声をかけられた。

えっ……なに……？

「どうしたのイリシスちゃん？」というマリーナさんの声が聞こえる。

しかし、わたしは、応えることはできなかった。

お兄ちゃんと同じ言葉だ……。

「ねえ、イリシスちゃん、どうしたの？」

あ、あのう、言葉が……。

「イリシスちゃん、口をパクパクさせているだけで声が出ていないわよ」

「なんかオレ、彼女に指を指されているんやけど……オレが悪いん？」

「……言葉」

わたしは、何とか声に出すことができた。

「言葉？ もしかして、オレのルカーナ語のことかな？」

わたしは、うんうん！ と激しく首を縦に振る。

「でも、ルカーナ語って、そんな大層なリアクションを採るほど珍しいもんちゃうやろ？」

そうか……お兄ちゃんが喋っていた言葉って……

「ルカーナ語っていうんだ？」

わたしは、ようやく言葉を普通に出せるようになってきた。

ルカーナ語かぁ……その言葉を聞くと、懐かしく、それでいて、とても心が締め付けられる……切なくなる感じがする。

ルカーナというのは、あのルカーナ大公国のことかなぁ……？

だとしたら、お兄ちゃんは、ルカーナ大公国の出身だったんだ。もしかしたら、この人がお兄ちゃんと知り合いだったり……しないよね？

そう偶然が何度も起きるわけではないか……。

わたしは、落ち着きを取り戻してきたので、このルカーナ語を喋る男の人を観察することにした。

年は、二十代半ばぐらい。髭を生やし、黒い髪をオールバックで固めている。

背も高く綺麗な顔立ちをしている。

カルい雰囲気を持っているけど……まぁ、はっきり言ってカッコイイ。

でも、わたしの趣味じゃないけど……だって、なんだか遊んでいるって感じがするもん。

「なんや、お嬢ちゃんはルカーナ語も知らへんのか？」

「し、知っています！」

わたしは、思わず叫んでしまった。

このわたしの態度に、ルカーナ語の男の人とマリーナさんはかなり驚いているみたいだ。

「そんなに大声を出さんでもええやん……。もしかして、オレ、なんか気に障ることを言った？」

ルカーナ語の男の人はすまなそうな顔をしている。

……少し、もうしわけない感じがした。

「……違います……ただ、その……昔、ルカーナ語を喋っていた人が近くにいたので……それでつい…
…すいませんでした……」

わたしは、頭を思いっきり下げた。

「なんか訳ありみたいやな。まあ、人はそれぞれなんか抱えながら生きてるんが普通や。詳しくは聞かんことにしとくわ。ところで、あんたら道に迷ってるんやろ。オレ、この街のことなら結構詳しいから案内したるか？」

「本当！ ぜひお願いするわっ！」

この提案に、マリーナさんは、一も二もなく飛びついた。

まあ、さっきまで道を聞くために、審問権濫用しようとしたぐらいだったのだから無理もないけど……。

「まかしとき！キミみたいな美人のためならこのエルバ、全力で案内させてもらうで！ ブルンブルンやで！ おっと、もちろんそこのお嬢ちゃんのためにもやで！ コンチクショウ！」

この人……テンション高っ！

しかも、わたしのことはついでもみたいだし（それに、コンチクショウってなに？）。

まあ……仕方がないよね……わたしとマリーナさんだったら、女性としての魅力では全然勝負にならないもん。

でも、わたしみたいな子供っぽい女の子のことが好みの人もあるかも……って、そんな人はロリコンじゃないのよ！

（さっきから同じツッコミを自分で入れているし……わたし、大丈夫？）

そんな人にモテても仕方がないよ！

むしろ、そんな人にモテたくないし！

とにかく、わたし達は、このエルバさんに高等法院まで案内してもらうことになった。

「まあ、ここから高等法院までは十分ぐらいやけど、せっかく出会ったんやし、名前ぐらい教えてえな」

エルバさんは、マリーナさんにすり寄って行く。マリーナさんはそれを、軽くあしらう。

「いいわよ。あたしは、マリーナ・ランカスティ。見たとおりの異端審問官よ」

「へえ、まさかと思っていたけど……それにしても、今時の異端審問官には、キミみたいな綺麗な人もおんねんなあ……そや！ 後で、一緒にお茶でもどうや？」とのエルバさんのモーションに対して、マリーナさんは「あら、異端審問官をナンパする人の方が珍しいと思うけど」と軽く流した。

マリーナさんの言うとおりで。

いくらマリーナさんみたいな綺麗な人であっても、黒い審問衣を着ていたら普通の男の人なら避ける。

実際に、マリーナさんのルックスに目を奪われた男の人が、彼女が審問衣を着ていることに気づくとすぐに視線を逸らすという光景を何度も見かけた。

「そうかなあ。オレは気にせえへんけど。いや！ むしろその方が燃える！」

「あなた、もしかして審問官属性？」

属性？

「なんやねん、その属性って？」

そうだ、属性ってなんだろ？

「……まあええわ。さっき着いたばかりやったら、すぐに仕事というわけやないんやろ？ 道案内のお礼も込めて、オレとお茶でもしようや」

エルバさんは、なおもマリーナさんにモーションをかける。

しかも、お礼を自分で要求するところなんて……積極的と言いうか、図々しいというか……あなどれ

ない！

「そうね……道案内もしてもらっているんだし……お礼はしなくちゃね」

マリーナさんもノリ気そうな素振りを見せる。

「そうや、そうや」

しかし……

「うーん、でも、あたしは異端審問官でも、まだ下っ端だから、上級審問官の許可がないと自由に行動することはできないのよね。つまり、あたしの場合だったら、第一審問管区長ルクト・ハンザ様の許可がいるわけ」

マリーナさんのやんわりとして、それでいて絶対的な拒絶をした。恐れ多いことにハンザさまの名前を出すとは……さすがはマリーナさん……これだったらエルバさんも諦めるしかないよね。

しかし、エルバさんの反応は、私たちが予想したものとは全く違っていた。

「なんや、それやったらオレが許可とったるで」とエルバさんは、なんともあっさりとした口調で言った。

このエルバさんの態度には、さすがのマリーナさんも、はあせったみたいで「あなた、本当にあたしの話を聞いていたの？ 検邪聖庁の許可がいるって言ったのよ」と早口で言った。

「もちろん聞いていたで。だから、ルクトの許可を取ればええんやろ？」

そのエルバさんの口調は、自信に満ちていた。

うわあ……この人、ハンザさまを呼び捨てにしたよ……。なんて、度胸のあ……いや、無礼な人なんだろう。

常識がないのかなあ……？

「あなた、自分の言っている意味がわかっているの？」

マリーナさんは、呆れている。

「あたりまえやん」

ますます胸を張るエルバさん。

「じゃあ、あなたってバカ？」

「バカって言うな！　せめてアホって言って」

「どっちでもいいわよ！とにかく、あんたみたいなバカが、ルクト様から許可を取れるわけじゃないっ！　それに、そもそもルクト様が、あなたみたいな人とお会いになるわけじゃないわっ！」

「えっ？　でも今朝も一緒にメシを食べたで」

「嘘おっしやい！　なんで、ルクト様があなたと一緒に朝食を食べるのよ。同じ嘘をつくなら、もう少しましな嘘をつきなさいよっ！」

「だって、オレら従兄弟同士やもん」

エッ、コノヒトハ、ナンテイイマシタ……？

「あれ？　言ってなかったけ？　オレの姓もハンザやねんけど。つまり、オレもハンザ家の一員というわけや」

ハンザ家—『永遠の繁栄を約束された都』と称されているティアスルートを首都に持つルカーナ大公国の君主。

そして大陸全土に支店を張り巡らせ、法王庁会計院の総財務管理者にも指定されているハンザ銀行のオ

一ナでもある名家である。

また、代々法王や枢機卿等の教会高位聖職者を輩出していることでも一目を置かれている一と何かの本で読んだことがある。

そうか、ルクトさまって……あのハンザ家の人間なんだ。

まさかとは思っていたけど……。

エリートにしてお金持ち……あと、ルックスと性格がよければ完璧だよ……。

「オレは、ルクトと違って分家やから、わりかし自由にやらせてもらってるわけや。まあ、ルクトとは年も同じやし、気も合うから結構仲がええねんで」

「それ、本当のことでしょうね？」

マリーナさんは疑り深い目でエルバさんのことを見ている。

「あれ？　なんで疑うかなあ。さてはキミ、オレに惚れたな？」

ナニヲイッテイルンダコノヒトハ？

「どうしてそういう結論になるのよっ！」

「ほら、よく恋人同士がこっそりと相手のカバンを盗み見たりするやん？」

「"するやん"って言われましても、まず、あたしとあなたは恋人同士ではなし、今はそんな場面でもないじゃないのよ！　ああっ、あなたみたいなバカとルクト様が従兄弟同士なんて全く信じられないわ！」

うん、うん、その通りだよ。

マリーナさん、さすが。

パチパチ。

「えーっ、ルクトもこういう感じやで」

えっ、本当？

「全然違うわよ。ルクト様は、知的でクールな雰囲気を持ち、それでいて、優しさも持っておられる、これぞ貴公子といってよい方よっ！」

そ……そうだよね……。ルクト様がこんなカルイ感じのバ……のはずはないよね。

「あいつ、外面だけはええからなあ」

エルバさんは、腕を前に組んでしみじみとした感じでそう言った。

その態度が、マリーナさんをキレさせた。

「まだ言うかっ！」

マリーナさんは、本気で怒っている。彼女は、コメカミに青筋まで立てていた。

「だ、だってほんまのことやもん……」

エルバさんは、マリーナさんの剣幕に押されながらも自分の主張を曲げようとはしない。

「これ以上そんなことを言うと、魔法であなたのこと燃やすわよ」

その声から察すると、マリーナさんは本気みたいだった……でも、それだけはやめておいたほうが……せめて、水系の魔法方が……。

「す、すいません……もう言いません……」

エルバさんは、マリーナさんが呪文を詠唱し始めたのを見てすぐにそう言った。

マ、マリーナさん、その魔法は、火系の高等多要件魔法じゃないデスカ……アナタハマチヲヤキツクス
キデスカ？

「わかればよろしい」

マリーナさんは、エルバさんが態度を改めたので満足そうに言った。

マリーナさんは、キレると怖いタイプなんだ……わたしも気をつけなきゃだよ……わたしって、結構失言が多いから……。

この後も、もう一度エルバさんの不用意な発言により、マリーナさんがキレかけたりもしたが、わたし達は、なんとかベルグ高等法院に到着することができた。

ふうっー、疲れたよ……。

《幕間》

オレは、間違っていたのか.....。

”彼女”を、汚した。

”彼女”を、貶めた。

.....そして、”彼女”から、全てを奪った.....。

.....それでも.....オレは、”彼女”の傍にいる。

”彼女”は、オレの罪の証。

”彼女”は、オレの無力さの証。

”彼女”は、オレの弱さの証。

今のオレには、”彼女”の他には何もない。”先生”に追いつこうとして、”あいつ”に、置いていかれないようにして、全てを失ってしまった.....。

そう.....全てを失った.....。

そして、その代償として『扉』を手に入れた.....。

『扉』は、オレの罪の証。

『扉』は、オレの無力さの証。

『扉』は、オレの弱さの証。

オレは、自分のためにも、そして、“彼女”のためにも、“あいつ”に会わなければならない。そうすれば、オレは、“彼女”に、贖罪をすることができる.....。

”あいつ”に.....ルクトに会わなければ.....。

お兄ちゃん……。

感情を抑えきれなくなったわたしは、お兄ちゃんの胸に飛び込んだ。

もう、離れたくないよ……絶対に……。

お兄ちゃんの身体から、わたしの行動に戸惑っているのが伝わってくる……でも、拒絶はされない……それだけでも……とても嬉しかった……。

……無視されてもいい……お兄ちゃんの傍にいられるなら、それだけでいい……それ以上は、求めない……だから……

わたしを、拒絶しないで……お願い……お兄ちゃん……。

「あっ……」

お兄ちゃんが、わたしの背中に手を回して抱きしめてくれた。

お兄ちゃん……こんなことされたら、わたし、切なくなっちゃうよ……。

言いたいこといっぱいあったのに……言えなくなっちゃうよ……。

お兄ちゃん……。

お兄ちゃんは、今わたしの側にいる。

もう、どこにもいかないよね.....？

わたしとずっと一緒にいてくれるよね.....？

ねえ、お兄ちゃん.....？

わたしは、お兄ちゃんの胸から顔を上げた。

お兄ちゃんは、わたしのことを真っ直ぐ見ている。

お兄ちゃん.....。

わたしは、もう自分の気持ちを抑えることができなかった。

わたしは、お兄ちゃんが好き。

ずっとお兄ちゃんと一緒にいたい。

だからお兄ちゃん.....わたしはもっとお兄ちゃんに.....。

わたしは静かに目を閉じた。

お兄ちゃん……。

「よお、ルクトとイリシスちゃん。こんな昼間から人前で熱すぎるんちゃうか？」

えっ……なに？

エルバさん！ どうしてここに？

タイミング悪すぎ！

しかも、イリシスちゃんなんてなれなれしいよ……。

それに、お兄ちゃんのことをルクトだなん……てっ！ ル、ルクトお！

わたしは、バツとお兄ちゃんから離れた。

エルバさんは、ハンザ家の一員。そのエルバさんが、「ルクト」と呼ぶのは、従兄弟であるルクトさま。

だから、エルバさんが、「ルクト」と呼ぶ人は、検邪聖庁であるルクト・ハンザさま……そして、今エルバさんが、「ルクト」と呼んだのは、お兄ちゃん……。

じゃあ！ お兄ちゃんがルクトさまなの？

なんなの？

全然わかんないよ？

いったいどういうことなの？

.....もう.....どうなってるの.....？

なにがなんだか分からないよ.....。

こうなったら本人に聞くしかない。

「お兄ちゃん」

わたしは、お兄ちゃんを睨む。

「な、何かな、イリシス」

お兄ちゃんは、強張った顔で、そう言った。

「何度読み返しても同じか……」

私は、『ルクト・ハンザ様へ』という書き出しで始まる手紙を折りたたむと、深いため息をついた。

何度読んでも書いてある内容が変わるはずがないのに……思わずこの手紙を手にとってしまう……。

私は、差出人が『ラル・ルッツ』となっているこの手紙を受け取ったとき、“やはり来たか……”と思った。

そして、その内容に目を通して、自分が漠然と抱いていた不安が、現実となったことを知った。

だめやったか……。

彼女を、この世界の流れから守ることができなかった……。

しかし、なんでや？

ルッツ卿の手紙には、卿自身が、彼女に魔法を教え、教会の一員として叙階したと書いてあった。

しかし、私には、これがルッツ卿一人の考えに基づいたものであるとは考えられなかった。

なぜなら、彼女が教会から受けた『務め』が、私の直属の異端審問官だったからだ。

『第一審問管区長付異端審問官』

検邪聖庁である審問管区長に関する人事は、法王庁の所管ではなく、法王選出会議の所管である。

しかし、管区長である私の意思を聞かずに人事が行われることなど通常は考えられない。

確かに、形式上人事権は、法王選出会議にあるのだが、実質的には各管区長に委ねられており、法王選出会議は単にそれを承認するにすぎなかった。

それなのに、今回のこの人事については、私に何の相談もなかった。

やはり、長老達の意味が働いているとしか考えられない。

あのことを、長老達に気づかれたかもしれへんな……。

しかし、そうなら、彼女を私の下に置くこととの整合性がとれない。

……まあ、長老達のことだから、取り敢えず私に彼女を与えてみて様子を見てみよう、と考えているのかもしれないが……。

どちらにせよ、彼女が今日ここに来ることには変わりはない。

彼女が、もう引き返せないところまで来ているのであるなら、私は、”検邪聖庁のルクト・ハンザ”として彼女に接しなければならない。

そうなれば、彼女は、もはや平穏な日常に戻ることはできなくなる。

そして、必然的に、自分の過去についても知ることになるだろう。

しかし、まだ彼女が引き返せるところにいるのなら……彼女を平穏な日常に戻し、自らの過去について知らずにすむようにしたい。

そして、そのためには……僕が”お兄ちゃん”だったことを絶対に知られては駄目だ。

ルッツ卿の手紙には、彼女はまだ僕の正体については何も知らないと書いてあった。

卿や長老達が、どうして彼女に、僕の正体を教えていないのかは解らないが、これは僥倖と言えよう。

かつて彼女が、”お兄ちゃん・と呼んでいた男が、検邪聖庁の一人であるということは、彼女のそれまでの存在基盤を一八〇度変えてしまう。

彼女を日常のある世界へ戻すためにも、それだけは避けなくてはならない……避けなくてはならないんだ……。

本当に？

本当に、それだけか？

本当に、それだけが自分の”正体”を、イリシスに知られたくない理由か？

私は、自分に問いかける。

本当に、彼女のためにそう思っているのか？

それだけなのか？

本当は、”お兄ちゃん”として振舞って彼女を騙していたことを、知られたくないだけじゃないのか？

私は、自分に問い続ける。

本当は、彼女に罵倒されるのが怖いだけじゃないのか？

”彼女のため”と言いながら、結局は、自分のことだけしか考えていないんじゃないか？

『ルクト、貴様は、卑怯な男だ』

”ヤツ”の声が、脳裏を過ぎった。

「違う！」

「どうしたんやルクト？」

.....声がした.....誰だ？ どうして私に言葉をかける？ どうして私なんんかに.....？

どうして？

どうして？

どうして？

「おい！ オレの声が聞こえへんのか！？」

”オレ”……？

そうだ……そうだった……今この部屋にはもう一人いたんだった。

私は、ようやく現状認識ができると、その声の主、親友であり従兄弟のエルバ・ハンザに目を向けた。

エルバは、さっきまで来客用のソファで寝転がっていたのだが、今は、上半身を起こしてこちらを見ていた。

「……いや……なんでもない……大丈夫だ……」

私は、自分の心の動揺を隠そうと、できる限り冷静を装った。

「なんでもないことあるかい。なんかおまえ様子がおかしいぞ。なんかあったんか？」

「……本当に大丈夫だ」

僕が、そう言うと、エルバは、ソファから立ち上がってこちらに近づいてきた。

そして、僕の背後に回りこむといきなりヘッド・ロックを決めてきた。

「な、なにっ」

「オラオラっ、そんな気取った喋り方するから、色んなものを溜め込んでしまうんや！
もっと肩の力を抜けや！」

「やめろ……」

「なにゆーてんねん！ スキンシップ！ スキンシップ！」

エルバはなおも技に力を入れてくる。しかも、恐ろしいほどの笑顔で。

こ、こいつ、逝っている……。

「わ、わかった……わかったから……」

「スキン！ スキン！」

エルバは、もはや意味の分からないことを口走っている。

しかし、本人は、恐ろしいほどにご機嫌な様子だ。もはや、“悪ノリ”を乗り越えて、“悪ヨイ”という感じだった。

死ぬかもしれない……。

天下の検邪聖庁が、頭の逝っているヤツにヘッドロックで逝かされるなんて……そんな死に様が許されていいはずがない！

「やめろや！ このアホ！」

そう叫ぶと、エルバは、パッと技を解いてくれた。

そして、親指を立てて「よし！ その意気や、ルカーナ魂を忘れたらあんで！」と言い放った。

.....ふうーっ.....こいつ本気で僕を逝かしにかかってたぞ.....恐ろしい男や.....。

僕は、自分の首筋を擦る。

エルバにヘッドロックをキメられていた首は、嫌な汗が付着していた。

この汗.....絶対僕のものだけやないぞ.....なんかイヤな感じ.....くさっ。

「男の汗ブrendは、友情の証！」

エルバは、親指を立ててニカッと笑った。

「なんやねんそれ！ 『ボクラ、青春マッサカリ”十七歳”探検隊！』か！？」

「おおっ.....ええ感じのツッコミや.....。それでこそ、オレの相方やで。いつでもオレの左は、ルクトの指定席やぞ」

僕は、エルバの言葉に笑顔で応えた。

身体が、少し軽くなったような感じがする確かに、エルバの言うように最近の僕は、肩肘を張りすぎていたのかもしれへんな.....。

生来が、そんな真面目な性格でもない、どちらかというとお調子者のええかげんな男やのに、「こうな

ければならない」という自分が作り出したイメージに縛られていたかもしれへんな……。

でも、そうせざるを得なかったのも事実だ。

僕は、人一倍自尊心が強い男である。

聖職者になろうとした動機も、「自分の能力を世の中に示したる！」という俗っぽいものだった。

決して「世界を救おう！」とか「他人の役に立つ人間なろう！」というような立派な動機からではない。

……しかし、今の僕は、それだけでは収まらないものを、自分の中に抱えている。

それは、一步間違えば、誇大妄想と言われてもしかたがないほどのものだったが、僕にとっては差し迫った現実的なものだった。

それこそ、「世界を救う」というような誇大妄想なことが、今、僕と僕を取り囲む世界では、日常なことなのである。

『聖女』。

『扉』。

『異端の聖者』。

『奇形なる聖騎士』。

『正統なる異端の後継者』。

これら全てが、僕と僕を取り囲む世界を、飽和させ、押しつぶそうとしている。

僕は、僕と僕を取り囲む世界から逃げることは許されない。

自分を騙してでも、あるべき世界の状態を模索し、それを現実化させなければならない。

そうだ……僕……私は、逃げるのが許されない……”彼女”からも……。

「ルクト！ また表情が暗くなってるで！そんな顔をしてると、もう一度ヘッド・ロックをかけるぞ！」

エルバが、またもや僕の首に手をかけてきた。

「わかった、わかったから」
僕は、慌てて笑顔を作った。

「うーん。いいね。ヨシ！」

エルバは、ニカッ！ と笑い、親指を立てた。

……そうやったな……僕は、いつもこうやって、こいつに救われてきたんやったな。

僕が何かに行き詰まったとき、いつもエルバは、僕に余裕を取り戻させてくれてきた。

それが、エルバの仕事でもあるとしても、僕はとても感謝していた。

最近、エルバと会っていなかったから、どんどん本来の自分を見失っていたんやな。

これは、エルバには感謝せなあかんわ。

「ありがとうな」

「うん？ 何が？」

「まあ、色々や」

「色々か」

「そうや」

「よし！ 色々やったら、こう叫べ！ 『僕は眼で処女膜を破れます！』とな！」

エッ……？

ナニヲイッテイルンヤ、コノヒトハ？

「だから……」

エルバの表情は、『何で分からへんかなあ……』という感じだ。

「わかったけど、なんやねんそれ？」

「『気合があるぞ！』っていうおまじないや。よう効くで、隣のエイドリアンもそう言った」

「絶対嘘や！っていうか、エイドリアンって誰やねん！」

「なんやと！ オレに色々感謝してるって言ったのに、オレの言うことにイチャモンつけるきか！？
コンチクショウ！」

「あたりまえやっ！ さっきの感謝は撤回やっ！」

「あああ、ここに訳の解らんことを言いはる人がおる。ここに訳の解らんことを言いはる人がおる」

「なんで二回も繰り返すねん！ まあええわ。おまえがそこまで言うんやったら、そのおまじないとやらを言ったるわ！」

「ほんまか？ じゃあ、三、二、一、キュ！」

「僕は眼で処女膜を破れます！」

「そんな奴はおらんわ」

「……」

「……」

僕とエルバの間に沈黙が横たわる。

そして、僕たちは同時に笑いだした。

「どうしようか……」

マリーナさんの声は沈んでいた。

声だけではない。彼女の表情も翳りを帯びていた。

マリーナさん、落ち込んじゃってるよ。

まあ、会うのを楽しみにしていたルクトさまと会えなかったんだからしょうがないか……。

わたし達が、今いる部屋に通されたのは、ベルグ高等法院に着いてすぐのことだった。

この部屋は、全体的に冷たく厳しい感じのする法院の建物の中では、比較的穏やかな雰囲気を持っている方だった。おそらく、普段は応接室にでも使われているのだろう。

わたし達が、ここでしばらくの間待っていると、青を基調とした司教衣を着たいかにも好々爺といった感じの穏やかな雰囲気を持っていたおじいさんが現れた。

まさかこの人が、ルクトさま……？

も、もっと若い方じゃなかったっけ？

予想をしていなかった人の登場で、わたしは、困惑してしまった。

「遠いところごくろうさまでした。私は、ベルグ大司教区を預らせていただいておりますブリュッケル・レファンダインです。この法院の院長も兼任させていただいております」

.....よかった。

一瞬、この人が、ルクトさまかと思っちゃったよ。

わたしの隣に立っていたマリーナさんが、動く気配がした。

「私は、今日付けでハンザ猊下付の異端審問官に着任いたしますマリーナ・ランカスティです。聖位階は司祭です」

マリーナさんは、恭しく跪くと、そう言った。

「ああ貴方が、あのランカスティ司祭ですか。お噂は聞き及んでおります。審問職は、前職とは勝手が違うので戸惑うかもしれませんが、がんばって下さい」

「ありがとうございます、レファンダイン大司教」

今までにないマリーナさんの聖職者らしい態度に少し驚きながらも、わたしも続いて挨拶をした。

わたしは、こういう場面に慣れていなかったので、マリーナさんの見よう見まねで挨拶をした。

.....あれ？

なんの反応もないよ.....わたしの挨拶のやり方が悪かったのかなぁ.....マリーナさんと同じようにやったはずなのに.....。

わたしは、恐る恐る大司教さまの顔を見てみた。すると、あの好々爺といった感じの姿はなく、そこには、高貴なる義務を身に纏ったライン教会高位聖職者の姿があった。

な、なんで.....わたし、なにか間違っちゃった？

しかし、そのような大司教さまの厳しい姿は、わたしと目が合うとすぐに消えた。そして、元通りの好

々爺の姿に戻った。

.....なんだったんだろ？

「正式な配属は明日になるので、お二人とも今日はゆっくりと休んで下さい」と言って、部屋から出て行こうとする大司教さまを、マリーナさんが呼び止めた。

「どうかしましたか、ランカスティ司祭？」

「ハンザ猊下とお会いすることはできないのでしょうか？」

「おそらく猊下の方から後ほどご連絡があると思いますので、それまでお待ち下さい」

.....というわけで、わたし達はまだルクトさまにお会いすることはできていないのである。

マリーナさん程ではないけどわたしも、ここに着いたならすぐにでもルクトさまにお会いできると思っていたので、少々テンションが下がりぎみだ。

でも、マリーナさんがここまで落ち込むってことは.....ルクトさまのこと本気で好きなんだ。

マリーナさん程の女性（ちょっと性格が暴走気味だけど.....）をこれだけ夢中にさせるんだから、ルクトさまってよっぽど魅力的な方に違いない。

こうなったら、わたしもマリーナさんの恋の応援団になる！

「そうだ！」

マリーナさんは突然立ち上がった。

な、何？

どうしたの？

いきなりわたしの応援パワーが効いたの？

マリーナさんは、私の方を振り向いて「せっかくこんな大都会にいるんだから、街に繰り出しましょうよっ！」と言った。

「な、なんですか？」

わたしは、いきなりのマリーナさんの豹変ぶりについて行くことができなかった。

「だーかーらぁ、めいっぱいオシャレして、この街の男達にあたしたちの魅力を見せ付けてやるって言ってるのよ！」

ピシッ！ とマリーナさんの右手人差し指がわたしに向かって指し出された。

.....そんな風に言っていましたか？

「あれ？ イリシスちゃんは、あたしのこの提案に乗り気じゃないの？」

「そうじゃないですけど.....で、でも、わたしは服といっても、この審問衣ぐらいしか持ってませんよ」

実は、ストアでいつも着ていたお気に入りのがあったのだが、田舎くさい感じがしたので、それは”存

在しない”ことにした。

「大丈夫。わたしの服を貸してあげるから」

「いいですよお……だって、わたしじゃマリーナさんのサイズに合いませんから」

特に胸のところが……やっぱり肉？

「じゃあ、この街で服を買えばいいじゃない。ベルグなら今年の流行物が揃っているはずよ。そうよ！
そうしましょう！」

結局、わたしはマリーナさんの勢いに押しきられてしまい、街へ繰り出すことになってしまった。

「で、どうするんや？」

今、僕とエルバは、ベルグの大通りに来ていた。

エルバが、「いっちょ！ ナンパでもしにいくか！ コンチクショウ！」と言ったからだ。

それに対し僕は、親指を立てて「了解！」と応えた。

もう、完全に昔のルカーナ時代のノリを取り戻していたのだ。

逃避といわれてもいいから今日一日だけでも、僕と僕を取り囲む世界を忘れたかった。

そうしなければ、自分を保てそうになかったのだ。

「まあ、かつてはティアスルートの最強コンビと言われたオレ達やけど、現役から退いていたおまえは、いきなりの実践はキツイやろうから、まずこのオレが見本を見せたるわ。

それで昔のカンを取戻してくれ」

エルバは、そう言うと、近くを通った背の高いスレンダーな美人へ向かって行った。

で、結果は……。

「おまえ全然あかんやんけ！」

僕は、右頬に平手打ちをもらって帰ってきた、エルバに対して半ギレでそう言った。

「す、すまん」

エルバは右頬を手で抑えながらすまなそうにしている。

「わかった、次は僕が行く」

「ちょっと待ってくれや。次は、次は、次こそは、絶対に成功するから……」

「ほんまやな」

「ああ、このエルバ様に二言はない」

ぶつかり合う男と男の視線。

そして、頷く男二人。

「よっしゃわかった。エルバ、僕におまへの華麗なるテックニックを見せてくれ！」

「了解！」

同日同時刻。

ベルグの大通りに面したとあるお店。

いかにもセンスの良い都会の人達が利用しそうなお店。

そんなお店の中で、わたしは、マリーナさんのオモチャと化していた。

「いやーん、イリシスちゃん可愛い♪」

マリーナさんは、試着室のカーテンを開けるなりそう言った。

わたしは、マリーナさんに選んでもらった服を試着してみて、それをマリーナさんに見てもらっている。

マリーナさんが選んでくれた服は、白いフリフリのたくさん付いている淡い青色を基調としたワンピースだった。

わたしは、この服を見て思わず口から出掛かったセリフが、「こんなのわたしには無理だよ！」というものだった。

だって、可愛らしすぎるんだもん。

しかし、わたしは、もうテンションが上がりまくっているマリーナさんの意向には反対することはできず、仕方なく、この服を持って試着室に入ったというわけである。

マリーナさんが「可愛い」と言ってくれたので、わたしは、もう一度しっかりと自分の姿を鏡で見てみた。

確かに可愛いかも……でも、なんかロリ系に偏りすぎている気が……わたし的には、もっと大人っぽい感じの服が着てみたいんだけどなあ……。

「あらっ、イリシスちゃん、なんか不満そうね……もしかして、『もっと大人っぽい服を着てみたい!』、なーんて思ったりしているんじゃない？」

「そ、そんなことあ、ありませんよ。な、何を言っはるんですか。あははははっ」

マリーナさんに心の中を見透かされて、わたしは、しどろもどろになりながら不自然に笑った（しかも、ちょっとルカーナ語も混じってしまったし……）。

「そうよね。やっぱりイリシスちゃんぐらいの年頃の女の子は、背伸びをしたいものよね。よし！ ここはお姉さんに任せなさい！

あたしが、イリシスちゃんを、一人前の大人の女性にコーディネートしてあげるわっ！」

マリーナさんは拳を胸の前で握り締めた。

うわー……この人全然わたしの話を聞いてないよ……しかも無駄に気合入りまくってるし……。

もう、わたしには、このテンション上がりまくりのマリーナさんを止めることはできそうになかった。

それからさらに二時間、わたしはマリーナさんのオモチャとして過ごした。

「おまえやっぱり口だけやないか！」

僕は、今度は左頬に平手打ちをもらってきたエルバに向かってそう言った。

「すまん……だけど、ちがうねん……あれやねん。あと、もう少しやってん。もう少しやってんけど……」

「もうええわ！ おまえにはまかせてられへん！ 今度こそ僕が行く！」

「待て待てい！ コンチクショウ！ おまえだけに行かすわけにはいかん。オレも行く！ ここは、勝負ということでどうや？」

「ああ、望むところや」

ぶつかり合う男と男の視線。

そして、頷く男二人。

『行くでっ！』

わたしは、一人で、人通りの多い道に立っていた。わたしの心臓は、さっきからバクンバクンと高鳴っている今わたしは、さっきお店でマリーナさんが選んでくれたばかりの服を着ている……。

マリーナさんが選んでくれたのは、白いブラウスと黒いスカートというシンプルなものだったが、それがわたしを大人びて見せていた。

自分で言うのもなんだけど”深窓の令嬢・という感じ……（すみません……ちょっと言い過ぎました……）。

いつもツインテールにしている髪を下ろして、軽く化粧をしているのも、わたしに”大人っぽさ・を与えていると思う。

マリーナさんは、わたしのコーディネートを全てを終えると「イリシスちゃん、すごく綺麗よ」と言って、わたしを鏡の前に連れて行ってくれた。

そして、わたしは鏡に映った自分の姿を見て、思わず「綺麗……」と言ってしまった。

……とんだナルシストぶりであると言われるかもしれないけど、そのときは、鏡に映った女性が自分であるとは思えなかったから、そういう言葉が自然に出てきてしまったのだ。

「これがわたし……？」

「そうよ。可愛い格好もイリシスちゃんには似合うけど、こっちの大人っぽい格好もいいわね」マリーナさんは満足そうに言った。

実は、わたしは、ストアに居た頃からオシャレなんか、あまりしたことがなかった。

まあ、一三歳から一六歳という女の子がオシャレに目覚める時期に、魔法の修行に明け暮れていたのだからそれも当然か……。

「で、イリシスちゃん。これからあなたに指令を与えます」

「な、何ですか？ 唐突に」

「今からナンパされに行きなさい」

「えっ？」

わたしは、マリーナさんが何を言っているのか全くわからなかった。

それをマリーナさんも感じたのだろう、「イリシスちゃん、もしかしてナンパって知らないの？」と聞いてきた。

「はい」

わたしは素直に答えた。

「合格っ！」

マリーナさんは、ガッツポーズをキメる。

な、何がですか？

「だから、イリシスちゃんの魅力が、世の男どもをどれだけ惹きつけるかを身をもって体験するのよ！
それが、真の大人の女性に近づく一番早い方法よ！」

マリーナさんは、返事も聞かずにわたしを大通りに連れて行くと「がんばっていい男を釣ってくるのよ♪」と言ってどこかへ消えてしまった。

わたしは、置き去りにされてしまったのだ。

ど.....どうしよう.....。

わたしは、ただ、呆然と立っていることしかできなかった。

審問衣を着ていない今のわたしは、ただの田舎から出てきた十六歳の女の子にすぎない（魔法は使えるけど……）。

それなのに、知っている人がいない大都会の真ん中に置き去りにされるなんて……悪夢だよお……。

それにさっきからキラキラした視線をいっぱい感じるし……。

わたしは恐る恐る周りを見渡してみた。複数の男の人と目が合った。

彼らは、誰が一番にわたしに声を掛けようかと、お互いを牽制しているみたいだった。

すぐに、わたしは目を逸らした。

あの人達、わたしをナンパする気なのかなあ……。

ナンパされるなんて初めてだよお……。

も、もし、変なことされそうになったら……魔法を使うしかないよね？

一般人に魔法をむやみに使うことは、厳しく禁じられているけど……この場合は仕方ないわよね？

うん。

わたしは、自分にそう言い聞かせると、来るであろうナンパを待った。

そして……。

「お嬢さん、今ヒマですか？」

ついに来ました！ 来てしまいましたよ！

ど、どうしよう？ こんな初めてだから、どうしたらいいのかわからないよ。

で、でも、これも大人の女性になるための試練なんだよね。

がんばれ！

わたし！

わたしは、勇気を出して、そっとナンパ男の顔を見てみた。

.....どうということ？

わたしの頭の中は、一瞬真っ白になってしまった。

「お嬢さん、今ヒマですか？」

僕はこの言葉を口に出してから、すぐに後悔した。

久しぶりのナンパだとはいえ、なんでこんな使い古された声の掛け方をしたんや？

僕の好みの女性がいたから舞い上がってしまったから仕方ないけど……こんなんじゃ、彼女に相手にしてもらわれへんかもしれへんやん。

しかし、僕の予想とは違って彼女は、僕の方を見てくれた。

彼女と目が合った。

綺麗な人やなあ……。

大人の魅力と少女の魅力の両方を持ち合わせている。

理想どおりや、僕の理想どおりや！

これって運命の出会い？ 運命の出会いや！

エドモンドー！ って誰やねん！？

ふーっ、興奮のあまり、わけのわからへんことを、心の中で叫んでしまった。

僕は、改めて彼女の顔を見てみた。

彼女の表情は強張っているようだった。

やっぱり、あんな古典的なナンパをしたからかなあ……もっとしっかりと考えてからしたらよかったわ
。

……脈なしか……これでは、エルバに笑われてもしかたないな……。

しかし、彼女の瞳は、僕を捉えたまま反らされることはなかった。

もしかして脈あり……でも、そうやったらなんでこんなに顔を強張らしてるんや？

わからへん……。

彼女の気持ちがわからへん。

お、お兄ちゃん……？

な、な、なんで、お兄ちゃんがいるの！？

しかも、わたしだってこと気づいていないみたいだし……。

それにしても、なにナンパなんてしてるのよっ！ わたしがどんな気持ちで、この三年間を過ごしてきたと思ってるのっ！

わたしは、お兄ちゃんと再会することだけを願ってきたというのに……。

それなのに……それなのに再会がナンパだなんて……あんまりだよ……あんまりすぎるよお……。

本当に泣きたくなってきたよ。

よし！

こうなったら、このままお兄ちゃんをからかってやろう！

そして、後でわたしが『イリシス』だってことをばらして、驚きのあまり腰を抜かすのを見てあげるんだからっ！

僕は、ナンパした女性と一緒にカフェにいた。テーブルの向こうに座っている彼女の表情は、もうあの強張ったものではなく、薄っすらと微笑みを浮かべた魅力的なものになっていた。

ふと、彼女の左手首に包帯が巻かれているのが目に入り、それが少し気になったが、今はそんな些細なことよりも、この場をどう盛り上げるかについて考えなければならない。

「えっと。じゃあまず自己紹介からはじめようか」

なに緊張しとんねん！

もっと気のきいたこと言えよ！

僕はあまりの自分の不甲斐なさに、ツッコミを入れた。

しかし、彼女は、「そうですね」と言って微笑んでくれた。

天使や……彼女は天使や！

もう、本気で惚れてもうたで！

いぐで、いぐで、いったるで！

よし！ まずは僕から自己紹介をするか。

「僕は、ル……」

……ふうーっ……あぶないあぶない。

あまりに興奮しすぎて、本名を名乗るところやったわ。さすがに本名を名乗るのはまずいやろ。

そんなことをしたら、僕が検邪聖庁やってことがばれてしまうかもしれへん。

そんなことになったら、彼女は退いてしまうかもやん。

ここは身分を隠さなあかん。

この恋は、マジで行くぞ。

僕、マジ恋。

「ルさんですか？」

彼女は屈託のない笑顔で、そう聞いてきた。

可愛い！

可愛すぎる！

ああ……でも、僕は”ルさん”ではないんや。

あっ！

でも本名を名乗られへんのやったら”ルさん”でもええかな。

そうや、そうしよう。

「そう、僕はルといいますねん」

彼女は、僕のこの言葉を聞くと一瞬”えっ”というような顔をした。

やっぱり、”ル”という名前じゃウソくさかったかなあ……一文字やし……。

しかし、彼女は、すぐに元の笑顔に戻り「個性的な名前ですね。わたしはそういうの好きですよ」と言った。

よっしゃ！ 通った！

しかも好感触や！

僕は心の中でガッツポーズを決める。

よし！

この調子やったらええ感じでいけそうや。

どうやエルバ！ 僕の実力はこんなもんやで！

僕は、どこにいるのかわからない従兄弟に向かって胸を張る。

「で、あなたのお名前は？」

「当ててみてください」

そう来たか！

そう来たか！

なんでいきなりクイズやねん！

そんなんわかるかつ！なんて言えない僕。

「ヒントはなし？」

「なし」

彼女は即答した。

「ちょっとだけ」

僕は、顔の前で手を合わせる。

「うーん」

彼女はしばらく考えていたが「いいでしょう。じゃあ、ルさんにとって親しみのある方の名前を挙げてみて下さい」という奇妙なヒントを出してきた。

そんなんで当たるんかいな.....まあええわ。

取り敢えず適当に名前を挙げてみるか。

「フィナ」

「違います」

「ルシア」

「.....違います」

「イリ.....」

「えっ？」

彼女の表情が和らいだ。

しかし.....

「ヤ」

「違います！」

彼女は、バン！ とテーブルを叩いて立ち上がった。かなり怒っているようだ。

なんでいきなり怒り出すねん。クイズ形式したのは彼女の方なのに……もしかして、情緒不安定な人？

「ドウシテオコッテイルンデスカ？」

僕は恐る恐る聞いてみた。

「まだわからないの！？」

彼女はテーブルの前に身を乗り出す。

「……と言われましても……なんか僕、怒らせるようなこと言いましたか？」

「これならどう！？」

彼女はそう言うと、テーブルの上のお手拭で自分の顔を拭き始めた。

そして、化粧を落とすと、手で自分の髪をツインテールにした。

僕は、この彼女の行動をただ呆然と見ていた。

「どうと言われましても……化粧を落とすと以外に幼い感じがするとか……」

いったい彼女は何が言いたいんや？

もしかして、これが彼女独特のアピール方法なんか？

確かに、ツインテールでこの顔は可愛い感じがするけど……こんな感じやったら昔から見慣れていたからなあ……って！

まさかっ！

ボクハ、トンデモナイコトヲシテシマッタノデハナイデショウカ……。

やばい！

シャレになれへん！

シャレになってへんよお！

よしっ！

こうなったら、

「あのう、すいませんが僕、ちょっと用事を思い出したので失礼させていただきます」

僕は急いでその場から離脱しようとした。

しかし、彼女の手が、僕の腕を掴んで離さない。

ヤッパリソウイカナイヨネ……。

僕はゆっくりと彼女の方を振り向く。

やはりそこには、成長して多少女性らしくなった見慣れた顔があった。

「もしもーし、手を離してくれへん？」

「だめだよ。聞きたいことが一杯あるんだから」

そして、一呼吸おいて彼女、いや、イリシスは「……ねえ、お兄ちゃん」と言って微笑んだ。

「さて、お兄ちゃんが黙っていなくなった理由を教えてくださいませんか？」

わたしは、「あっ、そういえば……」と言って立ち上がろうとしたお兄ちゃんを椅子に座らせると、そう切り出した。

「その前に、トイレに行ってもええ？」

「ダメ」

「ええやん、じゃないと漏らしてしまうぞ」

「漏らしてもいいよ」

このわたしの言葉に、お兄ちゃんは口を噤んだ。

本当に、往生際が悪いよ……情けなくなっちゃう……。

ここまで来たんだから、もっと堂々として欲しいよ、まったく……。

しかし、わたしは、このお兄ちゃんの情けない態度に対して、とても懐かしさ……それも心地よい懐かしさを感じていた。

わたし……本当に、お兄ちゃんと再会することができたんだ……。

追い求めていた人の情けない姿を見て、満たされるなんて……ちょっとイヤだけど、今わたしは、とても満たされている。

.....でも.....お兄ちゃんは、わたしに黙っていなくなった事実は変わらない.....。

この事実がある限り、また、お兄ちゃんがいなくなってしまうかもしれない。

.....そんなのイヤだよ。

せっかく会うことができたのに.....また、お兄ちゃんと離れ離れになるなんて.....そんなの絶対にイヤだ.....。

わたしは、理由を知りたい。

お兄ちゃんがいなくなった理由を知りたい。

お兄ちゃんは、わたしのことが嫌いになったから、いなくなっちゃったの？

わたし、お兄ちゃんにそんなに嫌われることをしたの？

わからないよ.....。

教えてよ.....。

応えてよ.....。

.....そうじゃないと.....わたし.....

また、ひとりぼっちになっちゃうよ.....。

わたしは、込み上げてくる涙を抑えることができなくなってしまった。

イリシスが、僕の胸の中にいる。

突然、イリシスが僕の胸に飛び込んできたのだ。僕は、このイリシスの行動に対して直ぐには反応することができなかった。

僕は、どうしたらいいのだろうか.....？

僕の両の手は、イリシスを引き離すか、このまま抱きしめるかどうか迷うがまま、空中を彷徨っている。

どうすればいい？

イリシスが、この三年の間、どんな気持ちでいたのか、少しだけ分かった.....。

僕の採った行動が、イリシスに『絶望』と『期待』を与えてしまったのだ。

『絶望』は、在り得ない未来を、イリシスに夢想させた。

『期待』は、在り得ない未来を、イリシスに向って進ませた。

全ては、僕の責任.....。

全ては、イリシスを完全に拒絶することができなかった僕の責任.....。

本当にイリシスのことを考えるのなら、三年前、はっきりとイリシスに告げるべきだったのだ。

『おまえは、私の道具にすぎない』ということ。

.....でも、僕は、そうすることができなかった。

イリシスを完全に拒絶することができなかった。

その僕に、今、また、イリシスを拒絶することができるのか？

もし、今そうすることができるのなら、三年前にもできたはずだ。

だから、僕は.....

イリシスの背中に両の手を回した。

イリシスは、驚いたらしく、初めは少し抵抗らしきものをしていたのだが、すぐに、完全に僕の胸に身を委ねた。僕達は、しばらく無言のまま抱き合っていた。

今イリシスは、顔を僕の胸に埋めている。

まだ、少し泣いているようだが、どうやら落ち着きを取り戻しつつあるようだった。

「お兄ちゃん……」

イリシスが顔を上げて、僕を見つめてくる。

僕とイリシスは、見詰め合った。

イリシスの瞳は、艶やかに濡れていた。

僕は、イリシスに引き寄せられていく。

イリシスは、目を閉じた。

僕とイリシスの唇は、もう少しで触れ合おうとしていた。

そして……

「よお、ルクトにイリシスちゃん。こんな昼間から人前で熱すぎるんちゃうか？」

誰や……こんな使い古された台詞を恥ずかしげもなく使うヤツは……と思ったら、エルバやんっ！

なんてタイミングのときに……でも、助かったんかもしれへん……もうちょっとで、取り返しのつかないことをしてしまうところやった。

ふう……助かったわ……って、ほんまに助かったんか？

僕は、さっきのエルバのセリフを思い出してみた。

そういえば、あいつ、確か僕のことを「ルクト」って呼びかけてへんかったか？

お兄ちゃん……。

感情を抑えきれなくなったわたしは、お兄ちゃんの胸に飛び込んだ。

もう、離れたくないよ……絶対に……。

お兄ちゃんの身体から、わたしの行動に戸惑っているのが伝わってくる……でも、拒絶はされない……それだけでも……とても嬉しかった……。

……無視されてもいい……お兄ちゃんの傍にいられるなら、それだけでいい……それ以上は、求めない……だから……

わたしを、拒絶しないで……お願い……お兄ちゃん……。

「あっ……」

お兄ちゃんが、わたしの背中に手を回して抱きしめてくれた。

お兄ちゃん……こんなことされたら、わたし、切なくなっちゃうよ……。

言いたいこといっぱいあったのに……言えなくなっちゃうよ……。

お兄ちゃん……。

お兄ちゃんは、今わたしの側にいる。

もう、どこにもいかないよね.....？

わたしとずっと一緒にいてくれるよね.....？

ねえ、お兄ちゃん.....？

わたしは、お兄ちゃんの胸から顔を上げた。

お兄ちゃんは、わたしのことを真っ直ぐ見ている。

お兄ちゃん.....。

わたしは、もう自分の気持ちを抑えることができなかった。

わたしは、お兄ちゃんが好き。

ずっとお兄ちゃんと一緒にいたい。

だからお兄ちゃん.....わたしはもっとお兄ちゃんに.....。

わたしは静かに目を閉じた。

お兄ちゃん……。

「よお、ルクトとイリシスちゃん。こんな昼間から人前で熱すぎるんちゃうか？」

えっ……なに？

エルバさん！ どうしてここに？

タイミング悪すぎ！

しかも、イリシスちゃんなんてなれなれしいよ……。

それに、お兄ちゃんのことをルクトだなん……てっ！ ル、ルクトお！

わたしは、バツとお兄ちゃんから離れた。

エルバさんは、ハンザ家の一員。そのエルバさんが、「ルクト」と呼ぶのは、従兄弟であるルクトさま。

だから、エルバさんが、「ルクト」と呼ぶ人は、検邪聖庁であるルクト・ハンザさま……そして、今エルバさんが、「ルクト」と呼んだのは、お兄ちゃん……。

じゃあ！ お兄ちゃんがルクトさまなの？

なんなの？

全然わかんないよ？

いったいどういうことなの？

.....もう.....どうなってるの.....？

なにがなんだか分からないよ.....。

こうなったら本人に聞くしかない。

「お兄ちゃん」

わたしは、お兄ちゃんを睨む。

「な、何かな、イリシス」

お兄ちゃんは、強張った顔で、そう言った。

《幕間》

『貴方は、何を欲しているのですか？』

”彼女”の声が聞こえる。

もう、何も映すことはないはずの、”彼女”の虚ろな瞳を見つめると、いつも、”彼女”の声が聞こえてくる。

それは、オレにだけ聞こえる言葉。

それは、オレだけを求める言葉。

それは、”彼女”がオレに向けた最後の言葉。

オレは、その”彼女”の言葉に対して、何と答えたのか.....よく思い出せない.....。

大事なことであるはずなのに.....よく思い出せない.....。

どうしてだ.....？

.....分からない。

.....思い出せない。

”あいつ”なら、分かるだろうか？

そうだ.....”あいつ”なら分かるだろう。

だから、オレは、”あいつ”に逢おうとしている。

「もう少しだ.....もう少しでお前に、”償い”をすることができる.....だから、まだ”行かない”でくれ.....
ルシア.....」

『交付契約説』は、ライン基本法第一条一項の『知恵者』を『教会聖職者』と解し、同条第二項の『真の知恵者』を『ライン法王』と解することを出発点とする見解である。

同説は、『力＝魔法』は、森羅万象を司る全法秩序最高の存在である『法源』から、特定の選ばれた者にのみ『交付』され、その者は、教会の定めた方法、即ち、『契約＝秘蹟』を受けることによって『力＝魔法』を使うことが許されるとしている。

同説に拠るならば、教会が魔法を独占することを正当化できるばかりでなく、教会聖職者以外の者が魔法を使用することを禁止することが可能なため、教会の公定見解となっている。

長い間、同説が教会が持つ強大な権力を背景に、唯一無二の支配的見解となっていたが、教会による魔法の独占が長期にわたるにつれ、かかる教会の魔法独占体制に対して疑いを抱く者達が現れるようになった。

しかし、魔法は、選良である聖職者しか使うことができないという意識が支配していた当時においては、彼らの言葉が力を持つことはなく、彼らの殆どは異端者として、教会によって火刑台へと送られることとなった。

人々は、教会の教えに反して魔法を使用しようとした者がどうなるかということを知っていたのだ。

『魔物』一魔に取り込まれし異端者の成れの果て……。

また、多くの人々にとって、普通に暮らす上で魔法を使う必要性が全くなかったことも、彼らが拠る存在基盤の脆弱さの原因となった。

一般大衆にとって魔法などは、自らの生活において価値のあるものではなかったのだ。

魔法の力を欲するのは、いつの時代も『世俗の腕』、即ち、俗界の君主・諸侯達だった。

彼らは、自軍の兵に魔法を使用させることができれば、他国に対して圧倒的に優位に立てると考えて

いた。

そして、世俗のレベルでは誰も成し遂げたことがなかったラスティア大陸統一を達成することを夢見ていた。

また、それと同時に、強大な組織力と魔法の力を背景とした教会が優位の現状に、反発心も抱いていたのである。

そこで、彼らの中の強硬派は、教会を離反した元教会律法師の力を借り、密かに魔法を自軍の兵達に学ばせていた。

しかし、それらの試みは全て失敗し、大量の魔物を生み出すだけに終わった。

その結果、かえって『魔法は選ばれた者しか使うことはできない』という法理の絶対性が証明されることになり、『交付契約説』は、疑うことなき絶対的通説の地位を占めるに至ったのである。

しかし、今から十年前、この『交付契約説』に対して、真正面から挑む異説が登場した。

ピエト・オステルによって提唱された『創造説有因論』である。

同説は、ライン基本法第一条一項の『知恵者』を『人』と解し、同条第二項の『真の知恵者』も同様に、『人』と解することを出発点とする見解である。

右のように異なる文言である『知恵者』と『真の知恵者』を、同じ『人』という一般的抽象的な概念と解するのは、この地上にいる全ての人々が力を創造する能力を持っており、その能力を発現させる要因は、全ての人々の中にあるという結論を導くためである。

即ち、同説は、教会による魔法の独占を否定する根拠となり得るのである。

そこで、同説は、教会に反目し、魔法の力を手に入れたがっていた『世俗の腕』達の間瞬く間に広がっていった。

このような動きに危機感を抱いた教会は、同説を強硬な態度で批判し、同説を支持する者はすべからく異端者と看なし、徹底的に弾圧した。

さらに、従来、法王特使という形で行われていた異端審問制度を強化するため、大陸を七つの審問管区に分割し、その各審問区ごとに、異端審問に関する全権を統括する枢機卿を配置した。

彼ら七人の枢機卿達は、『検邪聖庁』と呼ばれ、その実力は、教会最高クラスの律法師だった。

この新たな異端審問官・審問管区制により『創造説有因論』を支持し、教会による魔法の独占に異を唱える者は、すべからず異端審問にかけられ、制度的に裁かれることになった。

『検邪聖庁』と呼ばれる教会随一の実力者達が、大陸中に散らばり、その力と権威を背景に行ったかかる制度的異端審問により、教会に反発し『創造説有因論』を根拠に、魔法の教会からの解放を主張していた『世俗の腕』達のほとんどは、その家名を地図上から消すに至った。

しかし、『創造説有因論』の提唱者であるオステルは、その後も各地を放浪し、自らの説を広めて行った。

そして、オステルは、『ペジエの惨劇』を最後に姿を消すことになる。

自らの正統性を証明する『聖女』を残して。

「もう全然わかんないよっ！お兄ちゃんっ！ちゃんと説明してよっ！」

ここは、ベルグ高等法院の一室。

たぶん、この法院における重職者のための執務室だろう。

今、この部屋にいるのは、わたしとお兄ちゃんの二人だけだ。お兄ちゃんは、わたしに背を向けている。

さっき、カフェで詰め寄ったわたしに対してお兄ちゃんは、「場所を変えよう」と言って、わたしをここまで連れてきた。混乱していて頭に血が上っていたけど、さすがにこう人目が多いところで話すことではないと思い、お兄ちゃんに黙って従った。

この部屋に入るまでの間、私たちは終始無言だった。

歩いている間に、混乱していたわたしの頭も、次第に冷静さを取り戻してきた。

すると、今度は、ひどく不安になった。自分の足下に、突然ポツカリと大きな穴が開いたような感じた……。

本当に、お兄ちゃんはルクトさまなの？

じゃあ、ルクトさまはどうしてわたしと一緒に暮らしていたの？

わたしはいったい……なんなの……？

……わたしには、八歳以前の記憶が全くない……。

わたしの記憶は、お兄ちゃんと一緒に暮らしているところから始まる。

わたしがルッツさまから聞いたルクトさまの経歴一。

十年前に始まった大規模な異端審問に『検邪聖庁』の一人として参加。

その後期の最大の異端事件である『ペジエの惨劇』においては、教会軍総司令官を務められた。

そして、その後、法王庁立聖ライン大学において教会法学の研究に従事するため、第一審問管区長の職を辞され、聖界の表舞台から一時退場される。

.....丁度その頃に、お兄ちゃんはわたしとストアで暮らし始めた.....。

つまり、ルクトさまは、表向きは、教会法の研究に従事するとして職を辞され、実は、わたしとストアで暮らし始めたということ.....？

そして、再びルクトさまが現職に復帰されるたのが、三年前.....お兄ちゃんがいなくなったのも三年前.....。

考えれば考えるほどわけがわからない.....。

当時、法王の位に最も近い実力者と言われていたルクトさまが、どうしてストアのような田舎で年端も行かない少女と一緒に暮らしていたの？

考えられることは一つ.....その少女にはそれだけの価値があったからだ。つまりわたしには、何か教会高位聖職者が自ら対処にあたる秘密があるのだ。

わたしは、いったいなんなの？

わたしは、どういう存在なの？

お兄ちゃんは、わたしをどう見ていたの？

お兄ちゃんっ！

まさかこんなことになるなんて……あんなにはしゃいでいた自分が情けない……。

エルバは、僕と別れるとき「逃げるなよ」と言った。つまり、エルバは、この僕とイリシスの再会を画策したのだ。そして、僕は、それにまんまと乗せられた。

エルバ・ハンザー『ハンザ銀行エフィア支店長』。

ハンザ銀行の各支店の支店長は、その担当地域の情報官としての側面を有している。

特に、法王庁会計院総責任者として指定されているエフィア支店の支店長は、ハンザ銀行の全支店の中でも最も重要な地位にあった。

エフィア支店長は、法王庁会計院のトップという表の顔と、『教会の目』という法王庁の情報官という裏の顔の二つの顔を持っている。

他の支店長がハンザ家の情報官であるのに対し、エフィア支店長は、あくまでも法王庁の情報官である。

つまり、エフィア支店長は、ハンザ家の利益ではなく、教会の利益を第一にして動く。

エルバは、僕の親友であり信頼のおける従兄弟であるが、彼が『教会の目』であることには変わりはない。

したがって、今回のエルバの行動にも納得してるし、又、納得しなければならない。

それよりも、今のこの状況に対して如何に対処するかを考えなければならない。ここまで来たらもはや誤魔化すことはできないだろう……。

それに、嘘を重ねることで返ってイリシスを傷つけることになってしまう。

それだけは駄目だ……もう僕は、イリシスを傷つたくはない……。

イリシスが、この世界の流れの中で生きていかなければならないのであれば、僕はその中でイリシス

を守っていく。

僕がイリシスを騙していたことによって、彼女が僕を恨もうとも、僕はそれを全て受け止める。

僕は、自ら信じる秩序のために彼女を利用した……しかし、今でも僕は、それが間違っていたとは思っていない。

僕にとって、彼女にとって、そしてこの世界の秩序にとっての最善の方法だったと確信している。

イリシスを利用しても守らなければならないものが僕にはある。

『世界の秩序』。

僕は、ハンザ家の人間として、教会の一員として、そしてなによりも、『異端の聖人』、ピエト・オステルの弟子として、この世界の秩序を守らなければならない。

それが、僕の”存在理由”だ。

僕は、イリシスの方に振り返った。

イリシスの目には、今にも零れ落ちそうなぐらい涙が溜まっていた。

……イリシス。

僕は、イリシスから目を逸らしたい衝動に駆られた。

しかし、そうすることはできない。そうしてはいけない。

僕は、イリシスと向き合わなければならない。

そして、はっきりと自分の口で伝えなければならない。

一の『悲しみ』は、千の『可能性』に繋がる。

だから、いくら『残酷』な行為に思えてもそれに抛らなければならないときもある。

少なくとも、今がそのときだ。

「はじめまして・という言葉、貴方に使うことは適切ではないのかもしれませんが。私が、第一審問管
区長のルクト・ハンザです。今後あなたの上級審問官となります。リヒトフォーエン司祭、貴方の活躍
を期待しています」

わたしは、自分の目を疑った。

振り返ったお兄ちゃんは、さっきと同じ服を着ていたけど、わたしには別人に見えた。お兄ちゃんの喋り方、その仕草、表情、どれをとってもさっきまでのお兄ちゃんとは全く違っていた。

全てが洗練されている。

全てが計算されている。

まだ子供のわたしにはよくわからないけど、大人の色気というものもある。それらは、まさに教会高位聖職者として相応しいものだった。

そうか……お兄ちゃんは、わたしに対して、もう”お兄ちゃん”として接することをやめたんだ……。

……こんなの”お兄ちゃん”じゃないよ……。

お兄ちゃんと一緒に暮らした五年間の思い出……。

わたしの作ったプディングが好きで、わたしの分まで勝手に食べちゃうお兄ちゃん……。

いつも、本ばかり読んでいて、私が呼びに行くまで、ご飯を食べようとはしなかったお兄ちゃん……。

。

綺麗な女性を見るとすぐに鼻の下を伸ばす。困ったお兄ちゃん……。

わたしが村の近くの森で迷子になったとき、一晩中探して助けに来てくれたお兄ちゃん……。

わたしが寂しくて泣いていたら、いつまでもわたしの傍にいてくれたお兄ちゃん……。

そして……わたしに黙っていなくなってしまったお兄ちゃん……。

お兄ちゃんがわたしに見せていた顔は、全て嘘だったの？

お兄ちゃんは、わたしを騙していたの？

ひどいよ……。

ひどいよ……。

ひどすぎるよ……。

わたしは、お兄ちゃんともう一度一緒に暮らすことだけを考えてきたのに……そのわたしの願いは、決して適わないものだったなんて……。

「リヒトフォーエン司祭……」

「そんな風に呼ぶのはやめてよっ！」

わたしは、お兄ちゃんを睨む。

もうわたしの”お兄ちゃん”はいなくなっちゃった……。

もう一度一緒に暮らしたかったのに……。

もっとお兄ちゃんと一緒にやりたかったことがいっぱいあったのに……。

お兄ちゃんが、「わたしのことを必要だ」って言ってくれたのは、教会聖職者として”必要”ということだったの……？

だったら……。

わたしは、お兄ちゃんに背を向け、この部屋から出て行こうと扉に向かった。

「待ちなさいっ！」

お兄ちゃんが、わたしの手を掴んで引きとめようとした。

「離してよ！」

「どこへ行くつもりですか？」

「どこでもいいでしょっ！」

「そうはいきません。貴方は私の直属の審問官なのですから勝手な行動を許すわけにはいきません」

「じゃあ、もう審問官なんてやめるよっ！」

そう言った瞬間、わたしの右頬に痛みが走った。お兄ちゃんがわたしの右頬をぶったのだ。

わたしは、お兄ちゃんを睨もうとした……でも、できなかった。

……お兄ちゃん。

わたしの意識の全ては、お兄ちゃんの目に奪われた。その目は、様々な感情が入り混じっていた……。

どうして？

どうして、そんな目でわたしのことを見るの？

わたしのことを突き放すのなら、もっとちゃんとしてよ……そうじゃないと……わたし……どうしたらいいのかわからなくなっちゃうよ……期待しちゃうよ……。

「もっと、はっきり言ってくれなきゃわかんないよっ！ お兄ちゃんの本当に気持ちを教えてよっ！」

わたしは、お兄ちゃんの胸に飛び込んだ。

「—お兄ちゃんの本当の気持ちを教えてよ！」

僕は、イリシスを受け止めた。

.....そう.....ただ受け止めただけ.....。

イリシスは、両腕で僕の胸を叩き続ける。素直に感情をぶつけてくるイリシスの姿を前にして、先程の僕の決意は、揺らぎ始めた。

.....でも、僕の両手は、イリシスを抱きしめることも、拒絶することもできない.....。

頭では、分かっているのに身体は、動かなかった。

イリシスに対してははっきりとした態度を採らなければならないのに、そうすることができなかった。

僕は、いったい何をしているんや.....。

こんなに自分が優柔不断な人間だとは思わなかった。

少なくとも、今までは、決断すべきところでは、全てははっきりとした態度を採で臨んできたはずだ。

.....それなのに.....今、僕は、為す術をなくして立ち尽くしている。

これじゃ駄目だ……少なくとも話だけでもできるようにしなくては……。

僕は、イリシスを落ち着かせようと、彼女の腕を掴んだ。

すると、僕が掴んだ拍子にイリシスの左手首に巻かれていた包帯がほどけて床に落ちた。

これはなんや……？

僕は、その包帯の下にあったモノに目を奪われた。

イリシスの左手首には傷があったのだ。

それも、どう見ても自分でつけたとしか思われぬ傷が……。

「イリシス、これは……？」

イリシスは、上目遣いに僕を見つめる。

その瞳の潤んだ瞳が、僕の決意を消し去ってしまった。

「イリシス、これは……？」

お兄ちゃんは、わたしの左手首にある傷を見るとそう言った……。

……お兄ちゃんが……わたしのことをまた、『イリシス』って呼んでくれた……。

お兄ちゃんの表情は、検邪聖庁である”ルクトさま”のものではなく、“お兄ちゃん”のそれに戻っていた。

お兄ちゃん……。

わたしのお兄ちゃん……。

わたしの大好きなお兄ちゃん……。

……でも……この傷だけは……お兄ちゃんには見られたくなかったよ……。

『もう、お兄ちゃん！また、わたしのプディングを勝手に食べたでしょ！』

『ばれたか』

『ばれるよ！ 口の周りにそんなにクリームをつけていれば』

『えっ……クリームがついてるんっ？ あっ、ほんまや』

そう言って、お兄ちゃんは口の周りをペロリと舐めた。

こんなお兄ちゃんの姿を見ていると、怒る気も失せてくる。

はぁ……本当に頼りないお兄ちゃんだよ……こんなお兄ちゃんの妹をやっていて、わたしの将来は大丈夫かなぁ……と、本気で心配になってくる。

でも、こんな毎日がずっと続くのもいいかな。このままじゃ兄ちゃんが心配でお嫁に行くこともできないしね。

まあ、わたしがお嫁に行けなかったら、お兄ちゃんに責任を取ってもらっちゃおうかなぁ……でも、わたしみたいな可愛い娘は、お兄ちゃんにはもったいないわよね♪

あっ、そうだ、今度は、お兄ちゃんが前から食べたいと言っていた苺プディングを作ってみよう。

お兄ちゃん、喜んでくれるかなぁ。

もし、喜ばなかったら許さないんだからっ！

あの頃のわたしは、漠然とした不安あったけど、あの何でもない日常がとても楽しく、そして、それがずっと続くことを願っていた。

でも、お兄ちゃんは突然いなくなってしまった……。

わたしに何も言わずにいなくなってしまった……。

お兄ちゃん……わたしと一緒にいるのが嫌になっちゃったの……？

そうならはっきり言ってくれればよかったのに……。

ねえ……お兄ちゃん、なんとか言ってよ……。

お兄ちゃん、わたしのことが嫌いになったの……？

お兄ちゃん、わたしを独りにしないでよ……。

ねえ……お兄ちゃん……。

お兄ちゃん……。

お……兄ちゃ……ん……。

わたしは、何もない部屋の中で同じ言葉を繰り返して続けた。

私の周りには、お兄ちゃんのために作った大量のプディングがあり、それらは異臭を放っていた。

わたしは分かっていたのだ……もう、お兄ちゃんはこちらには帰ってこないということを……。

でも、それを認めたくはなかった。

だから、

死のうと思った……。

「イリシス、これは……？」

僕は、思わず昔のようにイリシスに呼びかけてしまった。

どうしてこんな傷が、イリシスの手首にあるんだ？

どうしてこんな傷が……これじゃあまるで、イリシスは、自ら命を絶とうとしたみたいじゃないか……。

こんな傷は、イリシスにあるはずはないんだ。だって、イリシスは、あんなに毎日を楽しそうに過ごしていたのだから……。

だから、僕は、安心してストアから去ることができたなのに……。

僕は、何か間違っていたのか……？

そんなはずはない……。

『お兄ちゃんには、わたしが必要……？』

ふと、そんなイリシスの言葉が僕の頭の中を過ぎった。

これは、いったいどういう場面で発せられた言葉だったのだろうか？

……そうだ、確か、イリシスと夕食を食べているときだ。でも、確かそのときは、なぜ、イリシスが急にそんなことを言い出したのか、全くわからなかったから、とりあえず適当にはぐらかしたはずだ。

「もちろん必要や」とでも言ったのかもしれない。

しかし、どうして僕はそんな言葉を今思い出したのだろうか？

あ.....そうか.....あのときのイリシスの表情と今のイリシスの表情が同じだからか.....。

『わたしには、お兄ちゃんが必要だよ.....』

あのとき、イリシスは僕にそう言っていたのだ。

.....それなのに僕は、それが分からなかった。

僕自身がイリシスの”日常”を構成していたことに気づいていなかった.....。

僕がいなくなったことが、イリシスから”日常・を奪ってしまった.....。

僕が、イリシスから”日常・を奪ったんだ.....そして、イリシスを自ら命を絶とうとするまで追い詰めた.....。

.....僕のせいかな.....。

僕は、イリシスの背中に腕をまわした。

イリシスの戸惑いが彼女の身体から伝わって来た。

しかし、その戸惑いもすぐに消え、イリシスは僕にその身体を委ねた。

「イリシス、この傷.....」

僕は……言葉を続けることができなかった。

しかし、イリシスには、僕が何を言いたいのかが伝わったようだ。

イリシスは、無理やり笑顔を作って……明らかに嘘とわかる言い訳をした。

そのイリシスの姿がとても痛々しくて……僕は、ただ「そうか……」としか言えなかった。

僕は、床に落ちていた包帯を拾うと、イリシスの左手首に巻き直した。

言い訳をするつもりはない……。

僕は、この傷を見るのが辛かった……。

これは、イリシスに対する優しさよりも、自分の辛さから出た行動だった。

それなのに……イリシスは、僕に「ありがとう、お兄ちゃん……」と言ってくれた……そう……言ってくれた……。

お兄ちゃんは、わたしの背中に手をまわし、わたしを抱きしめてくれた。

わたしは、少し戸惑いを感じながらも、直に、お兄ちゃんのその優しい抱擁に身を委ねた……。

「イリシス、この傷……」

わたしは、お兄ちゃんが何を言いたいのかは分かった。

……でも……本当のことなんて、お兄ちゃんに言えるわけないよ……。

「この傷？ お料理をしているときに怪我しただけだよ。だから、心配しないで」

兄ちゃんは、このわたしの空々しい嘘に、ただ、「そうか……」と応え、床に落ちている包帯を、私の右手に巻き直してくれた。

おそらく、お兄ちゃんにはこの傷の意味が分かっていたのだろう。

そして、全てをわかった上で、それ以上わたしに何も言わなかった……。

それがお兄ちゃんの優しさなのか、それとも、わたしの”弱さ・を直視することできなかつたからのかはわからない。

……けど、たぶん……それは、わたしには分からなくても良いことなのだ。

だって、わたしは、お兄ちゃんが傍にいてくれることしか望んでいないから……。

そして、わたしがお兄ちゃんの傍にいたためには、もうお兄ちゃんには、昔のように接してはいけない……。

……でも……お兄ちゃんは、今、わたしの傍にいる。

どんな形であっても、お兄ちゃんと一緒にいられるなら、わたしはそれでいい。

だって.....それがわたしの願いだから.....。

わたしは、お兄ちゃんの胸から身体を離すと、数歩後ろに下がり、お兄ちゃんに対して恭しく跪いた。

「ハンザ猊下、第一審問管区長付異端審問官イリシス・リヒトフォーエン、ただいま到着しました」

《幕間》

この頃.....あたしは、あの頃のことをよく思い出すようになった。

当時のあたしは、髪はボサボサ、頬がコケ、目も虚ろで、何を尋ねられても「.....すいません、すいません.....わたくしには、何も分かりません.....お姉様.....お姉様はどこですか？」と繰り返すだけ.....。

そして、あたしの身体には無数の暴行の痕があった。

『歪な自動人形』。

それが、当時のあたしを形容するのに最も適した言葉だ。

人形になったあたしは、何を尋ねられても、いくらに殴られても、どになに辱められても同じ言葉を繰り返すだけ.....。

あたしは、歪な自律性に自らの身体を委ねていた。

あたしは、逃げていたのだ。

.....そう.....あたしは、逃げていた.....あらゆるものから.....そして、世界から.....。

自分の大切な人が起こした悲劇。

自分の大切な人を奪った悲劇。

自分の大切な人に対する憎悪。

どんな言葉でもいい。その言葉によって、あたしの罪を確定させてくれるなら、どんな言葉でもよかった。

あたしは、自分の罪を確定してくれる存在を渴望していたのだ。

あたしの『断罪者』。

『ペジエの惨劇』と並ぶ重大異端事件『聖ルゴーニュの惨劇』を担当した異端審問官達が、その審問過程においてかなりの"行き過ぎた行為"が見られたことは今では公知の事実となっている。

偏頗なき客観的で公正な審問が行われていない実情を憂慮した教会上層部は、『聖ルゴーニュの騎士達の審問は、枢機卿以上の聖位を持つ上級審問官によって行わなければならない』との法王令を出した。

もともと、あたしの担当官は、そもそも異端審問官ですらなかった。

あたしがレクラム・クレメンスの婚約者の妹であり、生存者の中で最もレクラム・クレメンスに近い存在と思われていた為、他の者とは異なる機関の手に委ねられていたのだ。

『教会の目』

法王庁非公式情報機関。

その実態は全くの不明。

ただ、その名は"恐怖"という権威を伴って伝わっていた。

そして、あたしの前に現れた『教会の目』は、噂に違わない"恐怖"をあたしに見せつけた。

あたしは、どんどん追い詰められていった。

肉体に対する拷問。

精神に対する拷問。

『教会の目』は、私の口から吐き出せるものは全て吐き出させようとした。

そして、あたしは、もう肉体的にも精神的にも廃人同然と化した。

もし、法王令が出されるのが、あと少し遅ければ、今のように回復することはなかったかもしれない。

そして、新しいあたしの担当官は、三日後に現れた。それは、枢機卿の緋の衣を着た若い男だった。

あたしの『断罪者』。

彼は、今までのあたしを担当していた男とは違い、激しい尋問や暴力を用いてあたしから異端の事実を自供させようとはしなかった。

ただ、理性的に、そして淡々とあたしと向き合おうとした。

しかし、人形であるあたしは、歪な自律性に身を委ねていただけ……。

「貴方の名前は？」

「……すみません、すみません……わたくしには、何も分かりません……お姉様……お姉様はどこ

ですか？」

「貴方は、マリーナ・ランカスティさんですね？」

「.....すいません、すいません.....わたくしには、何も分かりません.....お姉様.....お姉様はどこですか？」

「貴方は、一年前から聖ルゴーニュ修道騎士団ノヒラント騎士館の副長の職に就いていましたね？」

「.....すいません、すいません.....わたくしには、何も分かりません.....お姉様.....お姉様はどこですか？」

.....笑える話だ。

彼のあたしに対する審問は、全く進展をみせなかった。

あたしは、懸命に歪な人形に話し掛けているその男の姿がひどく滑稽に思えてならなかった。

そんな状態が、二週間ぐらいは続いと思う。そして、ある彼の言葉によってその笑える状態は終わった。

「もう一度お聞きしますが、貴方は、私が誰か分かりますか？ 私は、異端審問官のルクト・ハンザです」

ルクト？

『オレは、ルクトに負けたくない……負けるわけにはいかないんだ……』

コイツ、イマナンテイッタ？

『マリーナ、姉さんは、ルクト様に嫉妬しているのよ。だって、レクラム様の中で、わたくしよりルクト様の方が大きいのよ……絶対そうよ』

ルクトダッテ？

『オステル先生の意思を継ぐのはオレだ！ルクトのヤツではない！ そうだろルシア！』

ソウイエバコイツ、ソナコトモイッテイタナ。

『マリーナごめんね。姉さんは、あの人の苦しむ姿を見たくないの。あの人の役に立てるなら、わたしはどんなみすぼらしい姿になってもいいの。あの人の中からルクト様への執着を取り除くためには、わたしが『扉』になるしかないのよ』

.....ルクト.....。

『.....ルシア.....本当はおまえがいればオレは満たされていたんだ.....オレはおまえの為だけに生き
たかった.....しかし、それと同じぐらいにルクトに負けたくなかった.....本当にすまない.....』

「.....ルクト.....ルクト.....ルクト.....」

あたしの身体が震え出した。

「.....ルクト.....ルクト.....ルクト.....」

あたしは、髪を掻き耨り始めた。

「.....ルクト.....ルクト.....ルクト.....」

あたしは、立ち上がった。

「.....ルクト.....おまえのせいだ.....おまえのせいで.....ルシア姉様は.....レクラム義兄様は.....」

そして、

「.....殺してやるううう！」

あたしは、男に飛び掛った。

疲労して精気が欠けていたあたしの身体にそれほどの力が残っていたことは自分でも驚いた。

あたしは、男の身体を審問室の壁に叩きつけ、男の首を力一杯絞めつけた。

本気で殺そうと思った。

しかし、次の瞬間にはあたしの身体は、男によって床に組み伏せられてしまった。

その後の記憶は、すっぽりと抜け落ちている。

おそらくあたしは、気絶してしまったのだろう。

次に、あたしの記憶が始まるのは、真っ白な世界からだった。

第四章 曖昧な輪は望む者の手の中に Ⅰ

ファレンス王トアス七世が、法王領エファーニアとの国境サヴィア侯領ライラントに兵を集結させはじめたという噂は、またたくまに大陸全土を駆け巡った。

それにより、親教会派と反教会派の君主・諸侯達は、緊張を高めることとなったが、彼らは互いに牽制し合うだけであり、実際に何か目立つ行動を起こそうとする者はほとんどいなかった。

ただ、各国の駐エフィア大使や情報官達が、法王庁の周囲で慌しく確実な情報を求めて動いていた姿を、エフィアの人々は日常風景として見ることとなった。

トアス七世がエフィア、具体的には法王庁に向かって軍を動かしている表向きの理由は、三ヶ月前に亡くなった法王ファラスト三世が、亡くなる直前に自分の後継者として指名したレクラム・クレメンスを、次の法王座に就かせるためである。

通常、新しい法王を選出するためには、まず、枢機卿会議で候補者を選定しなければならない。

次いで、その候補者が法王として相応しいか否かを法王選出会議が審査し、同会議が承認すれば、その者が新しく法王座に就くことになる。

しかし、前法王が没してから既に三ヶ月が経つというのに、まだ、新しい法王は選出されていなかった。

そして、ある日レクラムを自分の後継者に指名した前教皇の教書を持った、トアス七世の使者が法王庁を訪れた。

トアス七世は、レクラムの後見人を名乗り、彼を法王座に就けることを法王庁に要求してきた。

確かに、法王は自らの後継者を指名する権限を持っている。

しかし、右権限は、枢機卿会議の選定に代わるものにすぎず、法王座に座るためには、さらに法王選出会議の承認を必要とする。

そして、法王選出会議は、四対一でレクラムの承認を否決した。

ここで終わったのではあれば、これほどの騒ぎは大きくならなかったのだが、かかる結果を聞いたトアス七世が、「法王選出会議は、対立候補が存在しない場合には承認を否決することはできない」と主張し、右承認否決は無効であるとして争ってきた。

確かに、新法王選出手続は明文化されておらず、今までの慣習に基づいて行われてきた。

そして、対立候補が存在しない場合において、法王選出会議がその候補の承認を否決した先例はなかった。

したがって、かかるトアス七世の主張は全く失当というわけではなかったことから、その主張の当否が問題となった。

しかし、法王選出会議は、以下の二点を理由として、トアス七世の右主張の当否については判断を下さなかった。

第一、 そもそもファラスト三世の教書自体が偽物である。

第二、 レクラム・クレメンスは、異端者であり、法王候補資格欠格事由者にあたる。

右法王選出会議の採決に対して、トアス七世は、『右採決は同会議の権限濫用であり、事実上レクラムは法王に選出された』と反論してきた。

そして、自らの主催の下、ファレンス王国南部にある聖ルフィア大聖堂において新法王の戴冠式を挙行了した。

こうしてこれまでの長いライン教会の歴史の中でも前代未聞である対立法王が誕生したのである。

わたしは、モヤモヤしていた。

そう、モヤモヤだ。

つまり、モヤモヤしている。

モヤモヤ、モヤモヤ、モヤモヤ……。

むうーっ！

なによっ！

なんなのよっ！

わたしにはあんな態度をとったくせに、どうしてマリーナさんにはヘラヘラしているのよ。

もう！ 信じられないよっ！

お兄ちゃんのバカっ！

確かに、昨日お兄ちゃんに再会して、これからは"一部下"としてお兄ちゃんに接して行こうと決めたのはわたしだけど……。

でも、マリーナさんに言い寄られてヘラヘラしているお兄ちゃんをみていると……なんだかモヤモヤしてしまうよ……。

「どうしたんや、イリシスちゃん？」

わたしの横を歩いていたエルバさんが声をかけてきた。

むうっ、また、"ちゃん"付けでわたしのことを呼んでるよ、この人！

何度いっても直そうとはしないんだから……イヤになっちゃうよ。

わたしのことを"ちゃん"付けで呼ぶエルバさんに、初め頃は、「そういう呼び方はやめて下さい」といちいち言っていたんだけど、何度注意してもエルバさんはやめようとはしないので、今ではもう言うのをやめている。

ま、もう、あまり気にならなくなってきたからいいんだけどね。

「なんでもありません」

わたしは、そっけなくエルバさんに言った。

「あらあら……なんかオレ、イリシスちゃんに嫌われてんなあ……なんでやろ？　なんでやろうなあルクト？」

エルバさんは、前を歩いているお兄ちゃんに声をかけた。

しかし、マリーナさんに言い寄られているお兄ちゃんには聞こえていないようだった。

本当にもう！

へらへらしちゃってっ！

お兄ちゃんのバカっ！

「ルクト様っ！」

ランカスティ司祭が、僕の腕に手を絡ませてきた。そして、執拗に自分の身体を僕に密着させてくる。

うわっ！ 胸が、胸が、大きな胸があ！

ふっっ、あぶないあぶない。

一瞬理性が飛びそうになってしまった……。

それにしても、いったいなんなんだこの女は？

なんか僕のことを以前から知っているみたいやけど……昨日、会ってからずっとこんな調子や……。

いったい、なにを考えているんだ？

『異端審問官』として自覚があるのか？

でもこいつ、胸の大きさは自覚しているな……効果的に使って……じゃなくて！ とにかく、こいつに注意をしなくては。

「ラ、ランカスティ司祭……」

「なんですか？」

ランカスティ司祭は、一層自分の身体を密着させてきた。

「ちょっとまてえーい！」

僕は、彼女の身体を突き放そうとした。

しかし……。

ガシッ！

彼女は、僕の身体にしがみついてきた。

なにすんねん、この女はっ！

「やめなさいっ！ ランカスティ司祭っ！」

「いやです！」

「離れなさい！」

「いやです！」

「これ以上、このようなことをすると、貴方を罷免しますよ！」

僕は、きっぱりと言い切った。すると、彼女は、パッと僕の身体から離れた。

す、すばやい……。

「これでどうですか？」

ランカスティ司祭は、すました顔で何事もなかったかのように言った。

くそっ……殴りたい、殴ってみたい。しかし、ここは堪えるのが、検邪聖庁としての正しい態度だ。

「いいでしょう。これからは私との距離をこれぐらいは保ちなさい」

「嫌です」と即答する彼女。

「どうしてですか？」

この僕の問いかけに対して彼女は、笑顔で「だって、あたしルクト様のことが大好きなんですもの！」と答えた。

「だって、あたしルクト様のことが大好きなんですもの！」

な、なに！？

いきなり告白ですか！？

マリーナさんが"ルクト様"のことが好きだってことは知っていたけど.....展開が早過ぎるよ.....。

なんとかしなくちゃ.....なんとかしなくちゃだよ！

.....でも、どうして？

べつに、もうお兄ちゃんの"一部下、にすぎないわたしには、関係ないじゃない？

...本当は.....もう"お兄ちゃん、だなんて思ってもいけないんだよね.....。

でも、まだ心の中で思うぐらいなら.....うん、きっとそれぐらいならいいよね。

誰にも迷惑かけるわけじゃないし.....。

だから、そんなことぐらいしか許されないわたしには、マリーナさんがお兄ちゃんに言い寄ろが、告白しようが、あんなことや、こんなことをしようが、何も言う権利はないよね.....。

.....でも.....でも.....言いたいよお.....。

こんなのなんかいやだ.....いやだよお.....。

なにい！

この女、いきなりなにを言い出すねん！

アホちゃうか？

いやアホですわっ！

ほらほら、そんなことを言い出すから、イリシスが……泣きそうになってる……？

なんで？

目がゴミに入った……なんてことはないよな……。

ああっ！ もうっ！ なんでこんなことになるんや！。

こうなったらエルバにフォローを入れてもらうしかないっ！

僕は、エルバの方を見た。

エルバは、少し離れたところでニヤニヤしていた。

くそっ！

あいつ全然、僕を助ける気がないな。

.....ていうか、むしろ、面白がっているし.....。

しかし、暫くするとエルバは本当に僕が困っていることが分かったらしく、近寄ってきてくれた。

「こらこらマリーナちゃん、検邪聖庁さまがお困りになっているやん。それぐらいでやめといてあげなさい。イリシスちゃんも泣きそうになってるで」

エルバの言葉を聞いた彼女は、イリシスの方を見ると、少し困ったような表情をした。

「ルクト様、ごめんなさい。あたし、少しはしゃぎすぎたみたいです」

少しちゃうやん！ バリバリやん！ というツッコミを入れたくなかったが、検邪聖庁的にやめておいた。

なんでこんなことに体力を使わなあかんねん。今は、こんなことで余計な力を使っている場合やないのに.....。

今日の早朝、僕達は、ライン教の総本山エフィアに向かうためベルグを発った。

ベルグは、法王領であるエファーニア地方の大司教座の一都市である。

したがって、同じエファーニア地方にあるエフィアまでは徒歩で三日ぐらいの距離である。

昨日、エルバが長老達の使者として、僕を教会軍総司令官、『教会の旗手』に指名する旨を伝えにやって来た（エルバが、僕の部屋にいたのはそのためである）。

昨日は、様々なこと（僕自身でややこしくしてしまったが.....）があったので、この件についてはお座なりにしていたが、イリシスとのことが一息ついた僕は、すぐに動き始めた。

長老達は、直にエフィアに戻り、教会軍の編成に携ることを、僕に求めていた。

したがって、僕は、可及的速やかにエフィアに向けてベルグを発たなければならなかったのである。

そこで問題となったのが、『誰を同行者として連れて行くか？』ということだ。

エルバが同行するのは当然として、残りの同行者を誰にするのかについて、僕は思案に暮れた。

もともと、僕は、あまり大勢で行動することを好まない。僕の審問のスタイルも、少数精鋭である。

なぜなら、訴追権と裁判権の両方を併せ持つ異端審問官は、その与えられている権限が強大なため、自らの力の行使に対して謙抑的になることを心掛けなければならないと考えているからだ。

僕は、何よりも自分が持つ力が、他に与える影響について注意を払っている。

"力を持つこと"は自らと周囲を不幸にする可能性を伴うことを忘れてはならない。

したがって、今回の同行者もできるだけ少なくしようと考えていた。

そして、通常であれば、直属の審問官を同行者とするのが当然であるのだが、その一人がイリシスであったことが僕を悩ませた。

イリシスを、長老達の下へ連れて行きたくはない.....。

長老達は、既に"あのこと"に気づいているはずだ。

それにも拘わらず、イリシスを僕の傍に置いていることには、何か理由がある。だから、できることなら長老達がいるエフィアにイリシスを連れて行きたくはなかった……。

……僕は、もう……イリシスを僕の目の届かないところには置きたくはない……。

自分勝手と言われても仕方がない。

傲慢だと言われても仕方がない。

しかし、そうしなければ、僕は、今度こそ本当にイリシスを、見失ってしまうかもしれない……。

だから、僕は、不安を抱えながらもイリシスを同行させることに決めた。

第四章 曖昧な輪は望む者の手の中に III - i

『聖ルッツ救護騎士団』本部は、法王宮である『聖ペテル宮』から三路地挟んだ場所にある。

同騎士団は、今でこそ法王庁直轄の騎士団として公的に認められているが、三年前までは、その存在は隠されていた。

なぜなら、同騎士団は、「『魔』に取り込まれた人間を救う研究」というかつて異端視されていた研究を行うことをその目的としていたからである。

『魔』に取り込まれた者に対する教会の態度は、ひどく厳しいものだった。

『魔』取り込まれ人外の存在へ変貌していく彼らの姿を"見せしめ"、つまり『一般予防』として機能させていたからだ。

したがって、苦しみ悶えている彼らを『救う行為』は、教会秩序に反する行為、即ち、『異端行為』とみなされていた。

もちろん、かかる教会の態度に対しては、教会の外部からだけではなく、教会の内部からも批判が少なくなかった。

しかし、世俗の諸侯の中で、安易に『魔法』に手を出そうする者がいる現状では、かかる教会の態度もやむを得ないとするのが多数意見だったのである。

いくら異端審問制度を大陸中に整備したとはいっても、まだまだこの世界の秩序は不安定だった。

しかし、若い律法師達を中心として、「少なくとも『魔物』化を防ぐ研究だけでも教会主導でやるべきだ」という意見が強くなってきた。

そこで、かつて同分野の研究の第一人者であり、それがために教会を追われたラルが教会に呼び戻された。

そして、ラルの主導の下、今の『聖ルッツ救護騎士団』の前身となる組織が作られた。

かかる背景がある為、正式に教会の組織となった今でも、『聖ルッツ救護騎士団』は、教会の多数派からは"異端視"されており、その組織の規模も他の騎士団に比すれば小さいものだった。

それにも拘らず、同騎士団のような末端の組織にまで法王選出会議から「ハンザ卿が編成する『教会軍』に参加せよ」という指令が通達されたのには理由があった。

ライン教の二大騎士団であった『聖ルゴーニュ修道騎士団』と『法王近衛騎士団』のうち、前者は"抹消"され、後者は、法王崩御と同時に解散させられていたのである。

この現状においては、『聖ルッツ救護騎士団』のような小さな騎士団からも人を集める必要があったのだ。

同騎士団総長であるラルは、この通達を受け、同騎士団副長であるフィナ・ノバルティに対して二十名の修道騎士達を率いてルクトが編成する『教会軍』に加わるように命じた。

しかし、フィナは、このラルの命令に対して異議を挿んだ。

「自分以外の者を遣るわけにはいかないのでしょうか？」とラルに反論したのだ。

このフィナの態度にラルは目を閉じ、そして、一瞬呼吸を置いて「私は、貴方に命じたのですよ。ノバルティ副長」と静かに、そして穏やかに言った。

ラルには、フィナがどうしてこのようなことを言い出したのかについては分かっていた。

イリシスに対する"罪悪感".....。

それは、ラル自身も抱いているものだった。

しかし、そんな"罪悪感"によって、自らの使命を放棄することは許されない。

背負い込んだ罪は、最後まで、それこそ"結末"の時まで背負いつづけなければならない。

それが、これまでの人生において、多くの"罪"を背負い込んできたラルの信念だった。

「.....分かりました」

フィナは、そう言って、自分の唇を強く噛みしめた。

宿場ファル。

今日の早朝、ベルグを出発したわたし達は、日暮れ前にはこの町に到着した。

聖都エフィアに近いだけあって、かなり賑わっている。ベルグほどじゃないけど、人の数がとても多い。

しかも、様々な服装の人達がいる。

おそらく、わたしが想像もできないくらい遠い場所から来ている人もいるんだろう。

ま、それは横に置いて……。

今、わたしはマリーナさんと宿屋の一室にいた。もっと詳しく言うと、ベッドに並んで座っていた。

この宿屋は、予めエルバさんが予約してくれていたみたいで、すぐにわたし達は、それぞれ部屋に落ちつくことができた。

お兄ちゃんとエルバさんの男性陣と、わたしとマリーナさんの女性陣が二つの部屋に分かれた。

ま、こう言うと何の問題もなかったかのように聞こえるけど、実はお兄ちゃんが、この部屋割りについて話そうとしたら、マリーナさんが、お兄ちゃんと一緒に部屋に泊まりたいと激しく主張した。

そして、エルバさんも「それやったら、オレはマリーナちゃんと一緒に泊まるで！」と言い出したのだ。

しかし、半ギレ状態のお兄ちゃんの強引な決断により、今の部屋割りに落ち着くことができた。

……本当に、エルバさんとマリーナさんは何を考えているだろう……。

今は、急ぎの旅だってこと自覚しているのかなあ……特にマリーナさん……。

本当にもう！

あんなにお兄ちゃんにベタベタして！

お兄ちゃんも、お兄ちゃんよっ！

嬉しいそうにヘラヘラして！

「イリスちゃん、どうしたの？」

気がつくとマリーナさんが、わたしの顔を覗き込んでいた。

「な、なんでもありません……」

「本当に？　なんか機嫌が悪いみたいだけど……もしかして……」

まさか……マリーナさん、お兄ちゃんとわたしの関係に気づいたんじゃ……。

わたしは、昨日別れ際に、お兄ちゃんに、「ストアでのことは誰にも言うな」と言われたことを思い出した。

まさか、お兄ちゃんにそんなことを言われるとは、思っていなかった……。

確かに、わたしとお兄ちゃんとの関係が周囲に知られることは、"よくない"ことだとはわかっているけど……。

これは、仕方ないんだよね……？

仕方ないことなんだ……。

『部下』であるわたしは、お兄ちゃんに言われたことを守るだけ……。

誰にも、わたしとお兄ちゃんとの関係を知られちゃいけない。

もし、知られちゃったら……お兄ちゃんの傍にすることができなくなってしまうかもしれない……。

そんなのいやだ……いやだよ……また、独りに戻るのは絶対にいやだよ……。

わたしは、緊張しながらマリーナさんの顔を見た。

「……もしかしてなんですか？」

わたしは、ゴクリと唾を飲み込む。

「イリシスちゃん、エルバのこと好きなの？」

ドーン！ と、こんなありきたりな音がわたしの頭の中に響き渡った。

「な、なんでそういうふうになるんですか！？」

「えっ？ 違うの？」

「違いますっ！」

「だって、なんかイリシスちゃん、わたしのことを怖い顔で見ていたから、嫉妬しているのかなぁと思って……」

わたし……そんな顔していたの……？

でも、それがどうしてわたしがエルバさんのことが好きなことになるのよっ！

普通に考えたら、わたしが好きなのは……って……ま、それは横に置いて。

「別に嫉妬なんかしていません」

「そうかなあ……じゃあ、どうしてあたしを怖い顔で見っていたの？」

「本当にそんな顔をしていましたか？」

「してたわよ」

「……うぐっ」

このマリーナさんの自信のある断言口調に、わたしは言葉をつまらせてしまった。

……確かに、言われてみれば、そんな気もしてきた。

でも、それはお兄ちゃんが悪いんだよ。

お兄ちゃんが、マリーナさんにヘラヘラするから……。

お兄ちゃんが、わたしに話しかけてくれないから……。

お兄ちゃんが、わたしを見てくれないから……。

お兄ちゃんが……。

……やめよう……わたし何を考えているんだろう……こんなじゃ、お兄ちゃんとの関係に全然納得できていないじゃない……。

「まあ、そんなことより、イ・リ・シ・ス・ちゃん、お願いがあるんだけど」

「な、なんですか、マリーナさん……？」

「あたし、ルクトさまと二人っきりになりたいんだけど、協力してくれない？」

えっ？えええええっ！

「ダメですっ！ それだけは絶対にダメえ！」

わたしは、思わず叫んでしまった。

「ダメですっ！ それだけは絶対にダメえ！」

隣の部屋からイリシスの声が聞こえてきた。

あいつ、何を大声を出しているんや？

.....でも.....元気が出てきたみたいでよかった.....。

昨日、イリシスに「ハンザ猯下」と呼ばれたとき、正直言って僕は安堵した。

これで、これからの僕とイリシスとの関係をはっきりさせることができたと思ったからだ。

.....でも、僕は、同時に寂しさも感じた。

そして、それは安堵感よりも強かった。こんな割り切れない気持ちのまま、イリシスを守って行くことなんてできるのだろうか。

.....僕は、どうすべきなんだろう？

本来、僕が求めていたのは、オステル先生の『意思』であって、イリシスではなかったはずだ.....。

じゃあ、オステル先生の『意思』に対する自分の解釈を出した今.....僕には、イリシスが必要なのだろうか？

「おい、ルクト、なんかイリシスちゃん元気がええやないか？」

エルバは、ベットの上でゴロゴロしている。

こ、こいつ……ダレてやがる……。

ま、これは、エルバ特有のパフォーマンスであることは分かっているけど……でも、なんかムカツク。

「……そうやな」

僕は、自分の迷いを悟られないように、そっけなく応えた。

「ほんまは嬉しいくせに」

エルバは、わざと僕に聞こえるように呟いた。

僕は、エルバに自分の心を見透かされたような感じがして、少し鼓動が速くなるのを感じた。

そして、昨夜、エルバに言われた言葉を思い出す。

「おまえは、『聖女』を必要としているのか？」

……そのとき……僕は、即答することができなかった……。

エルバが、あえてイリシスのことを『聖女』と呼んだことも、僕に、自分が教会の人間としてイリシスに接していたこと、即ち、イリシスを騙し、利用していたことを思い出させられた。

もちろんイリシスを大事に思う気持ちはある。

イリシスには幸せになって欲しいと心からそう思っている。

だからこそ、イリシスを僕から遠ざけたのだ。

しかし、それが逆にイリシスを傷つける結果となってしまった……。

イリシスの左腕にある傷……それは、僕の『罪』。

『罪』は、償わなければならない。

しかし、もし、僕とイリシスを結ぶものが、この『贖罪』だけなら……僕自身はイリシスを必要とはしていないことになる……。

もし、僕がイリシスを必要としていなかったら……どうすべきなのだろうか……？

僕のイリシスに対する『贖罪』の意識だけが、僕達を結び付けているのなら……いや、そもそも、その『贖罪』でさえ、僕の独り善がりかもしれない。

イリシスは、僕に『贖罪』を求めてきたわけではないのだから。

このレクラムの件が解決すれば、僕は法王に再選出されるだろう。

そうなれば、今度はそれを断ることはできない。

オステル先生の『意思』に対する自らの結論を出し、『交付契約説』と『創造有因論』を整合させた理論、『二段階創造説』を完成させた今、僕には法王座に座ることを断る理由はなかったし、断ることもできなかった。

そして……『聖女』であるイリシスを必要とする理由もなかった……。

僕は、一度イリシスを捨てている……。

それは、"イリシスのため"というもっともらしい理由を付けていたが、結局のところ、僕自身がイリシスを必要ではなかったから、イリシスをストアに置き去りにしたのでは……もし、本当に僕自身が、イリシスを必要としていたのなら……

違うっ！

ガシャン！

イリシス達の部屋からガラスの割れる音が聞こえてきた。

僕は、直ぐに隣の部屋へ向かった。エルバも僕の後に続く。

ひどい不安。

悪い予感。

僕は、自分の身体を預けるようにして隣室の扉を開けた。

部屋の真ん中で、イリシスが立っていた。

感情のない蒼白な顔。

虚ろな瞳。

イリシスは、まるで糸の切れた操り人形のような姿で立っていた。

世界からの拒絶。

世界の瑕疵。

それは……

「『扉』……？ でも……なんでや……なんでや……だって……イリシスは、先生の『成果』なんやぞ……」

目の前で起きている出来事の意味を上手く理解することができない……。

何かが狂っている。

何かが間違っている。

自分の中で何かが欠けていくような感じがした……。

「エルバ様、『結界』を定立させましたから、『聖女』殿の状態にこれ以上の変化がなければ大事には至りません」

「これは、『扉』の"揺らぎ"か？」

「はい」

僕の後ろでエルバとランカスティ 司祭が話している。イリシスのことを話している。

『結界』。

『聖女』。

『扉』。

『揺らぎ』。

これらの言葉が、僕の耳を通り抜け、僕の意識を掻き乱していく。

……エルバは、イリシスが『扉』になる可能性があることを知っている……ということは、やはり長老達も……。

『扉』は、『異端』の象徴だ……。

『扉』は、"抹消"されるべきものだ……。

イリシスが『扉』になったら、"抹消"されてしまう……

"抹消"してしまう……。

そんなのは、嫌や……。

そんなのは、駄目や……。

そんなのは、許さへん……。

『わたしには、お兄ちゃんが必要だよ……』

あああああ！

僕からイリシスを引き離すことは許さへん！

「おいルクト！ 何をしているんや！ ランカスティ、ルクトを止めるんや！」

「む、無理です！ 猊下は、あれだけ数の要件の定立とほぼ同時に、立証までなされています。もう、自分の能力では間に合いません！」

「貴官はそれでも元聖ルゴーニュの騎士か！

くそっ！ ルクト！ お前は勘違いしているぞ！ オレは、お前一」

僕とイリシスを中心として、白い光の"壁"が広がっていく。

誰も、イリシスには近づけさせない。

誰も、僕からイリシスを引き離すことはできない。

誰も、イリシスを傷つけることは許さない！

「さあ、イリシス……僕と一緒にいこう」

僕は、誰の姿も映していないイリシスの瞳を見つめながら、イリシスをそっと抱き締めた。

ルクトが『聖女』を連れて失踪したことは、翌日の正午までには法王選出会議の元老達全員に伝わり、同会議が緊急招集された。

そして、太陽が少し西に傾く頃には、同会議の名において、聖ルッツ救護騎士団に対して、ルクト搜索の命が下された。

教会軍に加わるために聖ペテル宮に待機していた二十名の聖ルッツの騎士達の中から五人の騎士達が選抜され、ルクト搜索の任に就いた。そして、その五人の中に、フィナの姿もあった。

「いったい何を考えているのよ……ルクトさんてば……」

フィナにとって、ストアでの暮らしは、とても楽しいものだった。

それは、自分が、その場所に存在しているのは、"教会の務め"としてであることを忘れそうになるほどだった。

村の外れの小さな家で二人で住んでいる仲の良い兄妹。

村にある小さな教会に住む優しい老人。

そして、毎日がお祭り騒ぎの酒場、そして、それを取り仕切る自分。

とても楽しく、充実した毎日だった。

しかし、その毎日は、"作られたもの".....、『嘘』だった。実際ストアで行われていたことといえば、一人の少女を騙して、教会のために利用すること.....それ以上でもそれ以下でもなかった。そして、そんな残酷な現実を知らなかったのは、イリシスだけ.....。

当時フィナは、ルクトを除けば誰よりもイリシスの近くにいた。

イリシスが本当に楽しそうに毎日を過ごしているのを間近で見っていたのだ。

だから、ふと自分がイリシスを騙している側人間であることを思い出すと、心がざわついた。

そして、何の葛藤もなく"お兄ちゃん"を演じているように見えたルクトに対して徐々に苛立ちを募らせるようになっていった。

もちろん、フィナも自分が"加害者"であることは分かっていた。

ルクトに対して苛立ちを感じることは筋違いであることは分かっていたのだ。

しかし、ついにある日、フィナは自らの苛立ちを抑えきることができず、ルクトに対して「猥下は、イリシスちゃんをどう思われているのですか？」と問い掛けてしまった。

それは、教会の人間として著しく不適切な行為だった。

ルクトは、そのフィナの問いに対して「彼女は、オステル先生の『成果』であり、先生が『異端』ではないことを証明するための手段ですよ。私にとってそれ以上でもそれ以下でもありません。

ノバルティ司祭も、"彼女"が研究対象であることを忘れないようにして下さい。そうしなければ、正しい判断ができなくなります」と答えた。

フィナは、このルクトの言葉に対して怒りすら覚えた。

フィナには、イリシスを単に"研究対象"と考えている男が、どうしてあんなに自然に"お兄ちゃん"としてイリシス接することができるのか全く理解することができなかったのだ。

それ以降、フィナはルクトに対して何も言わなくなった。

言っても不愉快な答えが返ってくるだけだと思ったからだ。

そして、イリシスに対して自らの結論を出したルクトは、聖界の中央へ復帰すべくストアを去った。

イリシスを、単なる"モノ"であるかのように捨てて.....。

左手首を切ったイリシスを発見し、治療したのはフィナだった。

ルクトがいなくなった当初は、イリシスも特に変わった様子はなかった。

だから、フィナも安心してこれからのイリシスの未来へ思いを馳せていたのだった。

『べつに、あんな書物馬鹿なんていなくなっても寂しくないですよ。むしろ家が広くなった分だけかえって良かったですし.....。それに、わたしには、フィナさんやルッツさま達がありますからね』と、イリシスが笑顔で言っていたことを、フィナは今でもよく思い出す。

思い出したくなくても思い出してしまう。

そして、あのときのイリシスの本当の気持ちに気づいてあげられなかった自分を責めてしまう。

責め続けてしまう。

イリシスに対する『罪悪感』が、フィナの心を昏く満たしていく。

「今度こそイリシスちゃんを助けるのよ.....同じ過ちは繰り返しちゃいけない」

フィナは、自ら背負いし『罪』を改めて認識した。

.....わたし.....どうしたんだろう.....。

急に目の前が暗くなって.....それから.....分からない.....。

今は、外にいるようだけど.....木の匂いがする.....森の中かなあ.....？

周りが暗くてよく分かんないや.....。

身体が重い.....自分の身体じゃないみたい.....。

まるで、三年前のあのときみたい.....フィナさんに助けられた.....。

わたし.....死んじゃうのかなあ.....。

せっかくまたお兄ちゃんに会えたのに.....そんなの嫌だよ.....。

まだ、お兄ちゃんにわたしの気持ちをちゃんと伝えていななのに.....そんなの嫌だよ.....。

「.....お兄ちゃん.....」

「.....なんやイリシス、起きていたんか？」

お兄ちゃんの声がした。

しかも、すぐ傍……わたしの耳元で……。

わたしは、お兄ちゃんに後ろから抱きしめられていた。

……え……ええっ……ええええええっ！

どどどうしたの！？

いったいどうなってるの！？

わけがわかんないよ！

ちょっと待って……取り敢えず落ち着かなきゃだよ……。

えーっと、確か……わたしは、マリーナさんとお話をしていたんだと思うんだけど……どうしてこんなことになっちゃってるの？

もう全然わかんないよお！

.....もうイリシスから『魔』—"向こう側"の気配は感じられない。

『扉』は、また塞がったみたいだ.....よかった。

今、僕とイリシスは、街道から少し外れた森の中にいる。

僕達は、大きな木に持たれながら座っていた。

この場所までは、結界を張りながら飛んできたので、エルバ達に直ぐ見つかることはないだろう。

取り敢えず、これからどうするかを考えなければならない。

今、僕が採っている行動は、教会の秩序にとって決して好ましいものではない。

しかも、今はレクラム達とコトを構えている大事なときだ。

本当なら、教会秩序の擁護者である僕が、こんなことをしていて良いはずがない。

直ぐに、エルバ達のところへ戻るべきだろう。

.....でも.....僕にはイリシスがいる.....。

いったい僕は何をしているんだ？

自分でも頭がおかしくなったとしか思えない。

"手段"と"目的"を取り違えているとしか思えない。

自らの責務を放棄したとしか思えない。

「ルクト……オマエは、なにをしようとしているんや？」と小さく声に出してみる。

今は、『揺らぎ』の段階だからまだいい。

だが、もし本格的に『扉』が開き始めたら……

「僕は、どうするつもりなんや？」

自分で自分のことが分からない、理解することができない。

どうすれば良いのか分からない。

採るべき道が見えない、見ようはしていない。

このままでとイリシスは、『扉』になる可能性がある。

……僕は、この現実から目を逸らそうとしている……。

結論は、一つしかないことが分かっているのに、その結論を肯定することができない。

「『扉』は、この世界の秩序を害する存在や」

だから……僕は、イリシスを……

「……お兄ちゃん……」

イリシスの口から、微かに言葉がこぼれ落ちた。

イリシスは、意識を取り戻したみたいだ。

僕は、自分の動揺が伝わらないように、出来るだけ静かに「……なんやイリシス、起きてたんか」と言った。

イリシスに、自分の身体のことを悟らしては駄目だ。

イリシスに、自分が『聖女』であることを悟らしては駄目だ。

イリシスに……自分に『未来』がないことを悟らしては駄目だ……。

「お兄ちゃん……わたし……どうしちゃったの？」

わたしは、混乱している頭を落ち着かせると、お兄ちゃんにそう尋ねた。

「貧血を起こしたみたいやぞ。あの宿屋に居た医者が、外で冷たい風にあたっていれば、自然とよくなるって言ったから、ここまで連れてきたんや。どうや、気分は？」

お兄ちゃんは、まるで予め考えていた台詞であるかのようにスラスラと答えた。

わたしには、そのお兄ちゃんの手が、ひどくツクリモノのように感じた。

お兄ちゃんは、ウソをついている。

……そう思った。

でも、そのウソは、わたしにとって必要なものなんだろう。

だって、お兄ちゃんのその言葉からは、わたしに対する優しさが感じられたから……だからわたしは、お兄ちゃんを信じる。

「……うん、もう大丈夫だよ。マリーナさんとエルバさんは？」

「あいつらは、一足先にエフィアに向かった」

「じゃあ、ここからは……？」

「僕ら、二人だけや」

「本当！ 本当に本当！？」

「本当やって。だから、エフィアに着くまでは、昔と同じようにやっていこうや」

「うん！」

限られた時間とはいえ、またお兄ちゃんを、"お兄ちゃん"と呼べる。

また、お兄ちゃんは、わたしの"お兄ちゃん"になってくれた……。

本当に嬉しいよ……お兄ちゃん。

……たとえそれがウソでも……。

《幕間》

くだらない……本当にくだらない男だ。

この男が自分の父であると思うとこの身を引き裂きたくなる。

……しかし……今のオレに、この男の力が必要だ……。

「法王聖下、明日にはエフィアの城門を見ることができます。そうすれば、法王庁に巣食う異端者どもに、聖下のお力を存分に見せ付けてやりましょう。あんな銀行屋上がりのハンザ家の連中に教会を乗っ取られてはなりませんからな」

「その通りですぞ。聖下には、私が率いる九万のファレンス王国軍をはじめ、この世界の新しい秩序のためには死をも厭わない者達がついていますからな」

父にしろ、トアスにしろ何も"見えて"はいない。

何が、『この世界の新しい秩序』だ。

そんなものは、もうオレにはどうだっていい……もうオレの『秩序』は、終わっている……。

「そのとおりだ。クレメンス卿とトアス殿には、とても感謝している。この私が法王に即位することができたのも、お二人の尽力があつてのことだ。それにも応えるために、私は全力を尽くすつもりだ」

「それでこそ！」

「ご立派ですぞ！」

こんな適当な言葉で、心から喜んでいるこいつらの姿を見ていると、笑いが込み上げてくる。

しかし、笑っては駄目だ。

こいつらには、まだユメを見させておかなければならない。

本当に……くだらない……くだらなすぎるユメを。

「しかし……この『扉』というものは、とても不思議な存在ですな。

姿形は、ただの人に見えるのに、その力といたら……」

「ロシアには触れるな！」

オレは、隣にいるロシアに触れようとしていたトアスの手を振り払った。

手を振り払われたトアス自身だけではなく、父も驚いて身体の動きを止めている。

部屋に、重苦しい嫌な空気が満ちる。

暫くすると、この空気に耐えることができなくなった父が、「ま、まあ聖下も戦いを前にして気持ちが高ぶっておられるのでしょうか。

私達は、これできがるとしましょう」と言って、トアスと共に部屋から出ていった。

本当にくだらな過ぎる……。

……ルクト……オレは、早く貴様に会わなければならない。

貴様なら、オステル先生の『意思』に辿り着けるはずだ。

「.....なるほど、これまでの事情は把握しました。では、これから我々はどうすれば良いのでしょうか。

法王選出会議からは、今回のハンザ猊下搜索の件についてはエルバ殿の指揮下に入るように命ぜられています」

フィナは、可能な限り冷静に淡々と言葉を選んで発した。

表情も変えない。

フィナの騎士としての本能在、このエルバ・ハンザという男に警戒しろと告げていた。

一見、カルイ感じを装っているが、とてつもないキレを隠しているのが分かる。

さすが『教会の目』と呼ばれるだけのことはあると、フィナは得心した。

「ま、そんなに慌てる必要はないって。アイツもアホやないんやし、ちゃんと戻るべきときに戻ってくるって」

エルバは、右手をヒラヒラさせながら言った。

このエルバの態度はフィナに不快感を与えた。

しかし、それを表には出さないところが、さすが優秀な騎士と評判の彼女である。

「しかし、猊下は、『聖女』殿を守るために失踪されたのですから、我々のもとに戻ってこられるでしょうか？ もう既に猊下が失踪されてから二日が経とうしているのですよ」

フィナは、ルクトがイリシスのために元老達の命に反して失踪したと聞いたときは、自分の耳を疑った。

イリシスを"モノ"のように捨てたルクトが、イリシスのためにそんな行動に出るようにはどうしても思えなかったからだ。

しかし、エルバから詳しく事情を聞くにつれ、その事実を受け入れざるを得なかった。

「絶対に戻ってくるって。教会の秩序とルクトの秩序は相反するもんやないねんから」

「するとエルバ殿は、『聖女』殿を、異端とは考えていないのですか？」

「いや、アレは異端や」とエルバはキッパリと言った。

そこには何の迷いもなかった。

フィナは、『教会原理主義者』として教会の内外から恐れられている男の素顔を垣間見た気がした。

そして、イリシスの存在を否定されたことに対してひどく腹が立った。

だから「では、エルバ殿は、イリシスちゃんをどうするおつもりなんですか？」と言ってしまった。

フィナは言い終わってすぐ、少なくない後悔を顔に表した。

エルバは、ゆっくりとため息をつく。

「『イリシスちゃん』ね……なあフィナさん、そんな形だけの儀礼はええから、そろそろ腹割って話そうや。本当のあんたは、もっと感情的な人間やと思うけど……違うか？」

エルバの瞳がフィナの瞳を見据える。

フィナは、そのエルバの瞳から目を逸らすことができなかった。

『彼の瞳を見てはいけない』と頭では理解できているのに、身体が言うことを聞いてくれなかった。

沈黙……。

無言で見つめ合う二人。

笑みさえも浮かべているエルバに対して、フィナの表情は硬く、そして冷たい汗が頬を伝っていく。

エルバ・ハンザ……教会秩序に反する存在を悉く排除してきた『教会の目』。

あの『聖ルゴーニユの惨劇』の審問においては、最も激しく騎士達を追及し、それがあまりにも過酷なものだった為、それを諫める法王勅令まで出された男。

……怖い。

……とても、怖い……。

これは、本能から来る恐怖ではなく、理性によって裏付けられた恐怖だ。

こんな空気を身に纏えるまでに、この男は、どれ程の『場』を踏んできたのだろう……。

私には、全く想像がつかない。

でも、この男が揺ぎ無い『思想』を持っていることは分かる。その『思想』こそ、この男の強さであり、今私が感じる恐怖の源泉だ。

.....どうすればいい.....私には、この男と向かい合うには力が足りなすぎる.....。

このままでは、"飲まれて"しまう....."壊され"てしまう.....。

「フィナさん.....」

エルバが口を開いた。その声は、とても静かで、とても重いものだった。

フィナは、躊躇いながら「.....はい」と応えた。

「キミ、オッパイでかいなあ」

.....は？

「オレな、実はむっちゃオッパイが大好きやねん」

「.....は、はあ.....」

フィナは、エルバの会話に付いていくことができなかった。

「だから、オッパイ揉ませて」

「揉ませるかぁ！」

フィナは、絶叫した。

「お兄ちゃんっ！ もう朝だよ！ 起きなきゃダメだよ！」

耳元で、イリシスの声が聞こえる。

これは、夢か？

また僕は、ストアの夢を見ているのか？

この三年間、毎日、僕はストアの夢を見てきた。

どうして僕は、これ程までにストアの夢を見てしまうのだろうか？

しかも、全ての夢がとても楽しく、幸せで、光に満ちていた。

そして、その光は、まるで何かを隠そうとしているかのように、どこか後ろめたく虚ろな感じがした。

僕は、何を隠そうとしている？

僕は、何に怯えている？

僕は、何に後悔している？

『わたし、お兄ちゃんのことが必要だよ……』

「イリシス！」

僕が手を伸ばした先に、柔らかいモノがあった。

いったいなんだ、これは？

僕は、確かめようと揉んでみた。

よく分からない……だが、それほど大きくない……いやむしろ小さい……。

それにしても、頭がボーッとする……そうか、僕は眠っていたのか。

すると、さっきのイリシスの声が聞こえたのも夢の中でのことか……。

段々と頭が覚醒していく。そして、目の焦点も合ってきた。

それにしても、今僕が触っているモノはなんなんだ。こんなモノが僕の寝室にあったか？

「……こんな小さいモノが……」

次の瞬間、僕の右頬に強烈なパンチが入った。

「げほっ！」

僕は、ベッドの下に転がり落ちた。

「お兄ちゃんのバカっ！」

えっ……イリシス……どうして……？

僕の目の前には、胸のところを両手で隠しているイリシスの姿があった。しかも、半泣きになっている。

「あれっ？ なんや？」

「『なんや？』じゃないよ！ ひどい！ ひどいよお兄ちゃん！」

イリシスは、とうとう本泣きに入った。

「どうしたんやイリシス？ 僕、寝ぼけててよう分からんかってんけど……」

「お兄ちゃんは、わたしの胸を揉んだうえに、『小さい』って言ったんだよ！」

「なっ……なにい！」

頭の中で全てが繋がった。

そうだった……今、僕は、イリシスと一緒に逃避行中だった。

昨日、森の中でこの小さな小屋を見つけて、そこに泊まったんだ。

そして、僕を起こしにきたイリシスの胸を揉んで、『小さい』と言った……。

「ご、ごめんイリシス！ 僕、本当に寝ぼけててん！ 全然悪気はなかったんや！」

「……ひくっ……胸を揉んだことは許すよ……お兄ちゃんが寝起きが悪いことはよく分かっているから……」

「そうか……ありがとう……じゃあ……」

「でも！ わたしの胸を『小さい』って言ったことは許せないよ！ あれは、お兄ちゃんの本音だもん！ 寝ぼけてたから本音が出たんだもん！」

「そんなこと……」

……ある。

「ほら！ 言葉に詰まった！」

「……ごめんなさい……」

それから、小一時間、僕はイリシスに謝り続けた。

エルバは、フィナとの会談を終えると、マリーナを部屋に呼んだ。

エルバのフィナに対する印象は、"扱いにくそうだが使えるような人間"というものだった。

彼にとって"使える"いうことは、"教会秩序の維持と発展に有益である"ことを意味し、同時にそれ以外を意味しない。

歴代の『教会の目』の中でも彼ほど優秀で教会秩序の為に自分の全てを捧げている者はいなかった。

『教会原理主義者』。

これが普段の仮面の下に隠されているエルバの素顔だった。

「マリーナ・ランカスティ、入ります」という言葉とともにマリーナが姿を現した。

エルバは、彼女を両手を広げて歓迎してみせた。

しかし、それはあくまで"表面上"のことであることは、エルバの顔に浮かべられている"敵意ある笑み"見れば明らかだった。

そして、エルバは、唐突に切り出した。

「今夜、レクラム・クレメンスがこの町を訪れる。もちろん、"彼女"も一緒だ」

このエルバの言葉を聞いたマリーナは目を見開く。

そして、自ら語るべき言葉を搜した。

しかし、その行為はエルバによって遮られた。

「最初に言っておく。余計なことはするなよ」

普段の表面的なエルバしか知らない者が聞けば、自分の耳を疑うだろう。

それ程、冷たく一欠けらの人間性を感じさせない響きを持った言葉だった。

「貴官も教会の一員であるなら、任務の際には私心は捨てる。今貴官の生があるのは誰の恩恵によるものかもう一度よく考えることだ。オレは、元より貴官のことを信用していない。一度教会秩序を裏切った者は、もう一度同様のことをする。それが異端者だ」

「……私は、異端者ではない」

マリーナは、反抗的な態度でエルバを睨みつけた。

「異端者は、みな同じことを言う。『私は、異端者ではない。異端者であるのは貴方だ』と。もちろん、オレに向かってそんな言葉を吐きかけた者達は、みな火刑台に登り、そして消えていったがな」

エルバは、淡々と言葉を紡いでいく。

「オレにとって貴官らが異端の集団だったかどうかなんて重要なことではない。それよりも、教会秩序の擁護者であるはずの修道騎士だった貴官らが、自分達の影響力を考えずにあのような行為に及んだこと自体が許せない。あの事件が冤罪だったかどうかよりも、教会秩序を揺るがす隙を作ったことが、レクラム・クレメンスをはじめとする貴官らの罪だ。そのことを忘れないことだな」

エルバは、マリーナの返事を待った。

しかし、それはいくら待っても返ってこなかった。

代わりに返ってきたのは、「貴方に何がわかる」というマリーナの悲痛な声だった。

そして、その声は、次の瞬間爆発した。

「貴方に何がわかるというんだ！」

興奮したマリーナは、エルバの座る机に拳を怒りに任せて叩きつけた。

「貴方には分からない！ 貴方のような人間には、人の想いなんてわからないんだ！ その想いによって、人は強くもなれるし、弱くもなれる。それを、弱さの側面だけ捉えて、それを罪だと決めつけるなんて最低の行為だ！ そんなに秩序が大事なのか！ 一人の想いよりも秩序の方が大事なのか！」

マリーナは、今まで溜まっていたものを全て吐き出すように叫び続ける。

もう自分でもよく分からない状態になっていた。

「秩序！ 秩序！ 秩序！ なによそれ！？ 貴方は、自分が愛した人でも秩序の為なら喜んで犠牲にするんでしょ！ それっていったいなんなのよ！ 理解できない！ 理解したくない！ 教えてよ！ 貴方が言う異端者であるあたしに、判りやすく教えてみなさいよ！ あのときあたしにしたように、力づくでもなんでもいいから！ さあ！」

そして、言葉が途切れる。

沈黙……深い沈黙……。

マリーナは、静かに息を整えている。

そして、それをただ注視するエルバ。

数分後、その沈黙は、エルバによって破られた。

「言いたいことはそれだけか？」

沈黙を守るマリーナ。

「もう一度聞く。言いたいことはそれだけか？」

エルバは、そのマリーナの沈黙を肯定とみなし、「では、もうさがれ」と言った。

わたしとお兄ちゃんは、マリーナさん達と別れてからは、それまでと違って、のんびりとエフィアに向かっていた。

わたしがお兄ちゃんに「急がなきゃいけなかったじゃなかったけ？」とお兄ちゃんに聞いてみると、「ああ、なんかもうええみたいや」という答えが返ってきた。

わたしは、直感的に"お兄ちゃんは、何か隠している"と思ったけど、気にしないことにした。

もし、気にし始めたら、今のこの時間を"壊して"しまうかもしれない。

今は、このお兄ちゃんとの時間を大切にしたい。

エフィアに着いてしまえば、また、わたしはお兄ちゃんの『部下』に戻ってしまう。

だから、せめてこの時間を大切にしたい。

今、わたしと一緒に旅をしているお兄ちゃんは、ストアでわたしと一緒に暮らしていた"お兄ちゃん"なんだから.....。

わたしは、自分の"願い"を適えることができたのだ.....完全にとは言えないけど.....。

でも、それでもわたしは、今のこの時間に満足している。

そう、わたしは、満たされている。

それは、本当.....本当だよ.....。

うん！

もっとテンション上げよっと！

今夜わたし達が泊まる町は、エフィアに一番近い町、『トロア』である。

ここは、聖都エフィアの近くにあるにもかかわらず、とても小さな町だった（ストアとそれほど変わらないかも）。

それは、この町がエフィアに近すぎて、ほとんどの旅行客は、そのままエフィアまで行ってしまふからだ、宿屋の人が笑いながら言っていた（そこ笑うところ？）。

つまり、通り過ぎられてしまふらしい。

確かに、小さな町だけど、わたしにはベルグみたいな都会よりもこういった感じの町が好きだった。

.....わたしが田舎者だけだからかもしれないけど。

実は、今わたしは、お兄ちゃんと一緒にいなかったりする。

お兄ちゃんが考え事をしているみたいだったから、こっそりと部屋を抜け出してきたのだ。

今夜は、月が雲に隠れているから、散歩するのに適しているとはいえなかったけど、なんだかお兄ちゃんが考え事をしている姿を見ているのが少し辛かった。

お兄ちゃんは、この町についてから口数が少なくなってしまった。

わたしが話しかけてもどこか上の空だ。

ま、もうすぐエフィアに着いちゃうし、色々と考えなくちゃならないこともあるんだろうけど.....そうだよね、明日には、エフィアに着いちゃうんだよね.....。

分かっていたことだけど.....やっぱり寂しいかな.....もうちょっと、お兄ちゃんと二人で旅をしたかったよ。

でも、これからもお兄ちゃんの傍にはいることはできるんだから、ま、良しとしますか。

あれ？

宿屋があんなに遠くに見える……いつのまにこんなに遠くまで来てしまったんだろう？

さすがに、もう戻らなきゃ。

お兄ちゃんも心配しちゃうし。

わたしが、もと来た道に戻り始めようとしたとき、背後に人の気配を感じた。

一人？

二人？

……なぜだろう？ よく分からない。

一応わたしも、正式な魔法の修行を受けた異端審問官だ。

普通の十六歳の女の子よりも身体能力は上回っているはず……だと思う……いいえ！ ある！ この際、言い切っちゃおう！

しかも、しっかりと体術も修めているのだ。

それなのに、こんな近くの気配を読み切れないなんて……。

振り向く？

それとも、気づかないフリをして距離を開ける？

迷っている時間はない。

わたしは、後者を選ぶことにした。

出来るだけ冷静に、足を運ぶ。

相手に動く様子はない。

わたしは、歩き続ける。

いける、あともう少し距離をかせげれば……

「キミは、テレーズか？」

男の人の声がした。